

---

# 魔法少女もの。

yanagi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女もの。

### 【Nコード】

N6934R

### 【作者名】

yanagi

### 【あらすじ】

オリジナル魔法少女もの。

魔法少女＋架空戦記（それも末期戦っぽい）というにつちなもの。様々な作品の影響を受けています。

以前某所にいまの著者名と違う変名で投稿した短編を大幅に改稿しなおしたものです。

## Ep・00・a Prelude

『まずは、架空存在の出現と同時に勃発した今大戦においてその比類なき勇気を示し散っていった将兵。そして今現在も死闘を続けているであろう将兵にたいして感謝の言葉を送りたい。

今世紀初頭。

我々、人類は科学技術の急速な発展に伴い、二十世紀という新たな世紀を光り輝くものだということを当然の様に認識し、盛大に祝福しました。その結果はご存知の通り、歴史上類を見ない規模で発展し、文字通り世界規模で展開した二度の世界大戦。その結果、人類自身の手で地球を滅ぼせるまでの破壊の力を手にいれてしまいました。

そう、核の炎です。

我々、人類はその恐るべき破壊力に戦慄し、そして相互不理解から始まった戦火を交えない新しい形態の戦争が始まりました。冷戦です。

一体誰が、予想しえましたか？

一体誰が、予見しえましたか？

一体誰が、予想しえましたか？

ある日を境に、鋼鉄のように強固で当たり前だとされ絶対的なものだと思われた冷戦という構造そのものが雲散霧消に無くなるという事態を。そしてそれが、相互理解に基づく平和的なものでないことを。

当時　　といってもさして昔のことではありませんが　　八十年代の人々は十九世紀終わりの頃の人々と同様に来るべき二十一世紀を光溢れるものだとして認識している人も少なくなかったに違いありません。　　かく言う私もその一人でした。

私は宇宙人という存在を信じていない厳格な大人にとって、いさ

さか眉を顰めるだろう趣味があります。そして同好の友人達と大いに語り合ったものです。尊敬すべきアーサー・C・クラーク氏やアイザック・アシモフ氏、ロバート・A・ハインライン氏らの諸作品に登場する雲にも届く高層ビル、そのビルの間を中空のチューブ状の道路が張り巡らされ、その中をタイヤの無い空を飛ぶ車が走り、宇宙空間では流線型で銀色の宇宙船が自由に行き交う……。そんなものが二十一世紀の到来と共に出現するのではないかと。勿論、そんなものは妄想であることは分かりきっていましたが。それでも想像せずにはいられませんでした。何故なら、そこには少なくとも疫病や貧困、飢餓、そして戦争といった今まで人類を苦しめてきたものは存在しない幸せな世界だったからです。

私自身、そんな世界が到来することは無いだろう。そう思っていますし、事実それは真実なのでしょう。

ですが、二十一世紀といえば大変な未来のように思えた八十年代の初めごろ。その時代を生きた人々の中に、今のような状況に陥るなんて誰が予想できたでしょう？ もし、仮に予想できたとしても当時の状況を考えればその人間は大変な夢想家であろうことは間違いないようもなく、また悲劇論者若しくは終末思想、或いはそれらの両方を持ち合わせているのだろうと思われるだけでした。

であるからに、誰がその者の発言を真に受けたでしょう？ この場合、大抵は一笑に付されてお終いです。運が悪ければ、精神病院に担ぎ込まれてしまうかもしれません。それほど今の状況は当時にしてみればバカバカしいまでに空想的なものであり、異常というしかないのです。

兆候さえなかったのです。ですから誰にも責任なんてものは欠片も無いことは明らかなのです。

青天の霹靂とさえ言うてよい八十年代の終わりに起きた事件。それから今現在も進行中のクライシス。

当時、私も含め八十年代と何の代わりもない九十年代が来ることを疑いも無く生きていた人々にそれを予期し予想し予見できなかった

たとしても何の罪も無く、今更責任を追及するぐらいなら間近に迫った脅威を如何にすべきかが問題であり、唯一無二の命題であることは疑いようありません。

そう自覚すべきなのです。

人類が崖っぷちまで追い詰められているということを！』

国連においての演説より一部抜粋。

『魔法少女もの』

Ep.00・a Prelude

2001・01・01

頭上には青空が広がり、雲ひとつ無かった。  
只一つ。

黒く底の無い、ホールを除けば。

戦車兵である彼は、車上から最早違和感を喪失して久しい頭上の空から視線を地上へと戻した。

そこは戦場だった。

辺りは硝煙とモノが焼けた不快な匂いがたちこめ、遠方からは雷鳴にも似た砲声、それに比べれば小さいが間断なく響く銃声が耳朶を打ち、自身や同僚が乗る重器に良く似た機械が放つ駆動音が場を支配していた。そこには当然ながら人の怒声悲鳴が満ち溢れ、それ

に応じるかのように獣の咆哮或いは啼声が響き渡る。

其処は、まごう事なき戦場であり、まごう事なき容赦なく仮借なき生存競争の場であった。

人類は分水嶺を遥かに超え、文字通り後退〓腹切り場の崖っぷちに立っていた。

1989・01・13

この年、地上を二色に染め上げていた体制の片方が崩壊した。俗に冷戦と呼ばれていたものだ。

崩壊に至った原因は経済的問題から民族的なものまで多々あるものの最大の要因とっていいものがあつた。それこそが後に人類の天敵とまで呼ばれることになる架空存在である。

架空存在 (Fictitious Existence)。

後にそう名付けられるそれは、俗に怪物とも悪魔とも呼ばれる存在であり、その名が相応しい異形の造形を持っていた。

そして、その存在が正式に確認されたのはワースト・コンタクトとなつた架空存在との第一次接触　シドニー事件が公式には初めてであり以後、頻発することになる。

1989・07・17 / オーストラリア・シドニー

その日、シドニー上空に人類が初めて遭遇することになるホールが出現した。

それは直径三十メートルほどの孔というしかないもので、その向

こう側を伺いすることが出来ないほどの闇で覆われていた。

そのホールは一昔前のSF小説に出てくるようなブラックホールのように見えた。

実際、そのホールは変態重力源であることが確認され、それを証明するように周囲の空間は重力の影響のため歪んで見えた。またホールからは重力波が感知されてもいた。

この異常事態にNASAを始め国際的研究機関は喜々として探査機を打ち込んだものの直ぐにその消息は断たれ、その先が何処に繋がっているのかどうか知る手段はなかった。その点もブラックホールと同様だった。だが本物との明確な違いが一つある。それは、ホールが存在する場所が宇宙ではなく地球上であり、誰もが何故それが現れたのか想像すら出来ずただ首を捻った。

1989・08・17

ホールが出現して一ヶ月後、突如としてホールからは人類にとって未知なる存在である架空存在が出現し、我先にと地表目掛け殺到した。その光景はクモの糸を逆にしたものだろう。さながら細かい糸に殺到する亡者の如き勢いだった。

初めてそれを目にすることになるオーストラリア政府は当初、あまりに非現実的な事態に同対処していいのか判断がつかなかった。だが、架空存在の第一陣がシドニーの中心部に存在する市庁舎、その時計塔が架空存在の手で破壊されることにより、事態は一変する。市庁舎が全壊と呼べるほど破壊されるのにさしたる時間は必要なかった。そして架空存在はその矛先を市民に向ける。

架空存在は人間の姿を見つけると、獲物を前にした捕食者のように表情を歪め、天に向かって咆哮した。

それは歓喜の咆哮だった。そして、それは聞くものの魂を揺さぶ

るという点では神話に出てくる竜の咆哮によく似ていた。

そして、架空存在は行動に移る。行動を躊躇う理由など持ち合わせてはいないのだから。

それは言葉にすれば単純な捕食というしかないものだった。

だが、その光景は人間の目からすれば残虐極まりないものであり、生きたまま臓物を食われる者は悲惨の一語に尽きた。その恐怖は想像を絶したものであることが傍目から分かるほど、それは　凄惨な光景だったのだ。だが、架空存在にとって、人間とはその程度の存在でしかなかった。つまりは只のえさなのだ。

被食者が捕食者相手に慈悲も寛容も容赦も求めてはいけない。そんなもの初めからありはしないのだから。だからこそ、ただただ人間はいるかどうか知らない神に祈り、生を求め逃げ惑うしかなかった。

そして、その光景は電波というものに姿を変え、瞬く間に世界中に発信された。

人々はその映像を見、驚愕し、恐怖し、やがて知ることになる。

重力が存在している以上、生物学的にありえない巨大さの獰猛な獣を、彼等の行なった蛮行を、そして、生物が持つ根源的な恐怖を、そう、気付いたのだ。彼等こそ、これまで地球の生態系のトップに君臨して着た我々人類の天敵なのだと。

オーストラリア政府は今だ正体不明の架空存在を危険な害獣だとし、オーストラリア国防軍（ADF）を直ちに出勤を命じ、その殲滅に当たらせた。

当初、その殲滅（駆除という感覚だったが）は相手がどんなに大きかろうが所詮生物なのだからと楽観視されていた。だが、それも直ぐに覆させられることになる。

誤算だった。彼等、架空存在に対して、歩兵が持つ火力などは一  
点に集中しない限りは通じはしなかったのだ。そしてシドニーとい



う市街によつて起こされる混沌といつてよい混乱によつて、効率的な組織だった機動を十全に行なうことが出来ず、また市街地ということからその主力はあくまでも歩兵であり、彼等の持つ武器の大部分が相手に通じないという事実が本来勇敢なはずの兵士に恐慌という思いをはしらせる。

誰だつてそうだろう。自分が相手に対して無力ならば、どんなに勇敢な者であろうとも生存本能が頭をもたげあげ、逃げ出したいという思いに駆られても仕様が無い。まして、一度精神が挫いたものがすぐさま立ち直るわけも無く。第一陣である歩兵一個旅団は敗走し、やがて壊走という言葉が似合う集団とかしていた。

その段階に至り、政府はシドニーの放棄を決定。その時点で、市街地の三十パーセントは瓦礫と化し、現在進行形でその範囲を広げていた。そして架空存在の数も若干ながら当初より数を増やしてもいたが、それ以上に難民となつた市民が脅威の目前で溢れかえっている。最早、損害無しに事態を収めることが出来ない地点に来てしまったのだ。そのことを、政府上層部は否応無く認識した。自分達は何時の間にかルビコン川を渡つていたのだ、と。

そして本当の殲滅戦が始まる。

市外周に歩兵及び機甲戦力を用いた封鎖線を敷くとその外に布陣した砲兵隊によるシドニーへの昼夜の区別ない間断なき砲火をあびせ、そして燦り出された架空存在を上空に滞空していた攻撃ヘリによつて各個撃破していった。

A D Fにとつて慰めにもなりはしないが、少なくとも顕現した架空存在の大部分が防性フィールドを展開することの出来ない小型タイプだったことは幸運に値することであつた。何故なら、歩兵レベルの携帯火器（5・56×45mm弾）程度はおるか分隊支援火器でも彼等の鋼のように強固な外殻・外皮、弾力があり柔軟な皮下脂肪を貫くにはかなりの努力が必要だったが、砲兵による一斉砲撃。

ヘリにより対地ロケット弾は彼等の持つ強固な鎧を貫くには充分すぎるほどの力を秘め、撃破することが可能だったからだ。

数時間後。

架空存在殲滅作戦『Op・トルハンマー』の状況が終了し、それまで空間を満たしていた戦場音楽が嘘のように消え去り、周囲は静まりかえっていた。

戦闘の残滓である硝煙が周囲を覆い、粉塵が舞い落ちる。そしてそれらが晴れたとき、ADFの兵士はある事実に驚くことになる。

本来残っていてしかるべき死骸がまるで雪のように消え去り、肉片の欠片も血液の一滴も跡形も無くまるで初めから存在しなかったかのように雲散霧消していたのだ。

彼等は混乱する。

シドニーという都市を犠牲にしてまで、自分達は一体何と戦っていたのかと？

その疑問は直ぐに解消されることになる。

最早、元とつけた方がいだろうシドニー市街の一角、そこで全身を酷く負傷していたものの生存している架空存在を発見し、運よくこれの捕獲に成功したのだ。

その事実に関係者らは驚喜した。

正体不明の架空存在の解明の糸口になるからだ。

捕獲した架空存在は全長三メートルほどの狼と良く似た姿の架空存在で、自然界に存在する狼との外見の違いはその頭部に存在するダイヤモンド以上のモース硬度を誇る鋭利な角である。その角は伝説上の一角獣の持つそのようであり、地球上に存在している生物ではない明確な証明である。

架空存在が出現した当初、それが何であるか誰にも見当がつかず、生物学者は頭を悩ませた。そこに生きた標本が手にはいったのだ。

そしてシドニー事件の重大な損害とほぼ同時期に架空存在の目撃が相次いだことにより、最早、架空存在の問題はオーストラリアー

国だけに留まるものではないとされ、架空存在の研究は国連主導により行なわれることになる。

そして、その成果としてホール（第二のホールの出現によりシドニー上空のホールを 1st-Hole と呼称されるようになる）より現れた生物が人類と同様に炭素系生命体であることが確認されたが、地上に存在するいかなる生物とは違う塩基配列であり、その体細胞は地球上の生物には存在しない別種の細胞で構成されていることが判明し、正に異生物といってよい存在であることが分かった。

そして、ある特性が学会において公表される。

それは今だ確定したものではない仮説の域を超えるものではないものの、それは一定の信憑性のあるものであった。その仮説とは『時間経過における存在の確立』である。

即ち、一定時間が経たなければ、架空存在は生物として我々の住む世界に対し自己の存在が確定されず、顕現直後に生命活動を止めてしまえば細胞の欠片も残さず、文字通り世界から消えてしまうというもので、つまりは存在が確立される以前では架空存在は死体すら残さないということであった。

そして、それを裏付ける要素として新たに発見された未知の粒子が挙げられた。この粒子 後にエーテル粒子と名付けられるの特殊性は粒子自体の消失の一点を挙げるだけで分かるだろう。存在確立以前に架空存在の生命が停止すると、架空存在を構成する体細胞はエーテル粒子に変換し、空間に放たれる。

エーテル粒子自体の働きは、特殊相対性理論において否定されたエーテル理論のエーテル粒子そのものの働きを示した。これにより、架空存在の特異性は益々顕著になる。科学者の中には、架空存在はエーテル理論が成立している世界で誕生したのではないかと唱えるものもいた。

そしてそれら特異性及びその異形なる外見により、それまで官民間わず種々雑多な呼称で呼ばれていた架空存在が初めて公式に『架空存在（Fictitious Existence）』と使用さ

れることになる。

その仮説が公表され、直ぐにそれが事実であると人類は問答無用に知らされることになる。仮説が発表された直後、第二のホールである2nd-Holeがソビエト連邦南部、ウクライナに出現したのだ。そして、2nd-Holeの規模は1st-Holeの倍の規模を持ち、2nd-Hole出現直後に顕現した架空存在の群の規模はシドニー事件の比では無く、その総数は百を優に越え、その内容は小型から中型が主力であり、シドニーに出現していなかった大型タイプが数匹確認された。

架空存在の出現を確認したソビエト連邦軍上層部は当初樂觀視していた。シドニー事件のことは知っていたものの、それほど信用してはいなかったこともあったが、彼等は単純に信じていたのだ。戦車の砲撃を浴びて生き残れる生物は存在しないと。そしてそれが過ちであることを直ぐに思い知らされることになる。そう戦慄と供に。

1989・10・10 / ソビエト連邦 / ウクライナ・ソビエト社

会主義共和国

上空には六十メートルを超える巨大なホールが確かな存在感と供に存在し、その直下、広大なウクライナの平原には百匹を超える数の架空存在が居た。

半分にも満たない規模の架空存在によりシドニーは壊滅され、歩兵では無力ではないものの撃破するには多大な労力を必要とし、どうしようもないほど非力であるという事実。更には全長数十メートルに達する大型架空存在の存在。ソ連軍に対し、悪夢以上の何物でもない光景がウクライナの平原に現出していた。

ソ連軍はシドニーで試みられたように、前方に封鎖線を引き戦車及び砲兵による砲撃を敢行した。

それはロシア帝国の時代から連綿と続く大砲は戦場の女王であるというドクトリンを正しく継承したもので、火力とは即ち鉄量のみというように、ただただ鋼鉄の雨を架空存在の頭上に降らせた。

そしてその目論見は九分九厘成功する。

だが残り一分、数にして十匹を少し超える程度の架空存在により、その目論見は破綻し失敗することになる。

それまで飛行可能な架空存在を確認されていなかったため、架空存在は空を飛ぶことが出来ないのだとされていた。だが、それは誤りであり、飛行能力のある架空存在は確かに存在していた。

中型に分類される架空存在の数は三十。その中で飛行能力を有するのは数にしておよそ三分の一にあたる十匹。それらの架空存在は翅を振るわせ、また羽を羽ばたかせて飛翔する。その速度は音速には届かないものの下手なヘリや飛行機よりも早く、またその機動性は地球に存在するどんな飛翔体よりも優れていた。

滞空していた対戦車ヘリは同じ高度を高速で飛行する架空存在の衝撃波に翻弄されそのまま体制を持ち直すことが出来ず錐揉みしながら墜落し、甲虫型の架空存在は、己の身体を砲弾に見立て、音速の一手手前のスピードで砲兵の陣地に強襲した。その一撃は並の重砲の砲弾よりも深く地面を抉り、その衝撃により付近に存在した全てのものが吹っ飛んだ。

空中では翼のある蜥蜴のような形の架空存在が五匹ほどの群で飛び交い、目に付いた戦車や自走砲の頭上から火炎弾を浴びせる。もともと上部装甲は正面装甲より薄いこともあり、戦車はやすやすと火炎弾に装甲を融解され焼き穿たれ、戦車や装甲車は次々に爆破炎上していった。

砲兵という兵種ゆえ近接対空兵器を持ち合わせておらず、また地对空ミサイルは架空存在の機動性に翻弄され戦果を挙げることとはなく、戦車兵は必死に低空を飛ぶ架空存在に向かって車載されている機銃を放つが、機銃の射線は架空存在の軌跡を虚しく追っていた。

立った十にも満たない数の架空存在により、砲兵陣地は危機的状

況に陥り、戦車は対抗手段も無くただ逃げ回っていた。

そして、砲火の圧力によってこれまで抑えこまれていた飛行能力のない他の架空存在が圧力の減少を知ると一斉に蠢動を開始した。

封鎖線は阻止線へと何時の間にか役割を変え、塹壕に潜んでいる歩兵は決死の努力で押し留めようと懸命に架空存在に向かって手持ちの火器で対抗していたが、架空存在の突撃は歩兵の火力で対抗するのが難しく、徐々にではあるが阻止線は食い破られていった。

この事態に現地司令官は航空支援を要請する。

希望の担い手である近接基地から緊急発進した大部分の航空部隊は忸怩たる思いを抱きながら、戦場の手前で引き返すことになる。

当初、架空存在の存在を確認されていない高空から進行し、その本隊を爆撃することを目標にしていたが、変動重力圏の存在により高空からの進行を諦め、中高度まで下降した航空部隊は、飛行タイプの架空存在を相手にしつつなんとか戦場に着き、そこで濃密という言葉も生温い架空存在による弾幕によって次々に被弾し墜落していった。

その原因となるものが二つあった

一つ目は、ホールから半径五十キロ圏内の高空における変動重力異常。

二つ目は、中空から低空における架空存在の絶対的対空能力。

その二点によって、航空支援は封殺されてしまった。

そしてこの時点で架空存在の第二陣が顕現し、その総数を一気に増加させた。

歩兵が塹壕より見える視界の七分は架空存在により満たされ、残り三分だけが本来見える平原の光景だった。

狂乱した彼等は、咆哮を上げる架空存在に向けAKやRPKなどの火器を手当たりしだい撃つが、傍目からもそれらが彼等架空存在に対して有効だったとはいえなかった。

綻びを見せてはいたものの細かいながら線として機能していた阻止線は、これが決定打となり次々と食い破られ戦線は崩壊していつ

た。

ソ連軍は逐次投入の愚になることを知りつつも、更なる増援を向かわせてはいた。それしか手が無いことを誰もが知っていて、それをしない理由も無かった。打てる手を打つ、それは当然の行いかもしれないが、それでもそれが有効だとはとてもではないが言えなかった。

増援部隊が到着したときには周囲は数え切れないほどの数の架空存在で埋まっており、既に救出すべき部隊は壊滅していた。少ないながらも生き残っていた部隊は、生存の為に孤軍奮闘していたが、その努力は実ること無く包囲の輪は次第に狭められていき虚しく各個撃破されていく。

そして、程なく増援が壊滅したという報告がクレムリンにいたソ連上層部に伝わることになる。彼等は驚愕とともに震撼し、戦慄した。そして遂には禁忌とされていたスイッチを押すことを決断してしまった。

苦渋の決断である。

つまりは何十年ぶりになる核の炎が地表を焼いたのだ。

戦術核により放射能に汚染された大地。

流石に核の熱量には耐えられないらしく地上に架空存在の姿は無く、架空存在は確かに殲滅された。

だが、2nd-Holeには影響らしい影響は見られることはなく顕在であり、いつ架空存在が顕在するのか分からなかった。そして、核を撃ったことが引き金になったのか、それとも何等関係性が無いのかは分からないが、この頃から世界中で十にも満たぬ数の比較的小規模な架空存在が頻繁に出現するようになる。

これは直径数メートルクラスのホールが極短時間に開くことが原因であり、出現自体は一過性のもので単発ではあったものの、その対処は困難を極めた。何故なら、ゲリラ的に出現する架空存在に対

して警察力では歯が立たず、正規軍レベルの武装でなければ太刀打ちできなかったからである。

この対処の為に国家は苦慮し、その対策は難航した。

この時、国連の場に置いて一つの演説が行なわれた。

それこそ、後々まで語られ続けることになり、結果的にある組織を成立させる要因になった。

その組織とはホール及び、架空存在を全人類が直面し立ち向かうべき最大級の災害だとし、国境線の垣根を超え対処するという

TOC「Team Of Countermeasures against Catastrophe」 対架空存在機関である。

後世の史家はTOCの成立を持って、人類と架空存在との比類なき生存闘争の本格的な開幕であると結論付けている。

1999・07・01

十六世紀の預言者の予言はある意味において正鵠を射ていた。但し、襲来したのはどこぞの大王ではなかったが。

架空存在のワーストコンタクトから十年。この間、九十年代初期には五十億を数えていた人類の人口が三十億人までに減り、世界には1st-Holeから7th-Holeまでの七個の大小のホールと、架空存在の巣に相当する建築物であるタワー群が同数の七個存在していた。そしてその勢力範囲はユーラシア大陸の大部分、アフリカ大陸の地中海沿岸部分まで伸張し、1st-Holeの存在するオーストラリア大陸はその全土が既に陥落しており、架空存在の魔手は周辺の島嶼群に向かって今尚その進行は止まっていない。

そんな年、ある重大な事件が起きる。

それは後世の歴史書によればシドニー事件と並ぶ規模のものである。ターニングポイントとなり、やがて架空存在との戦争における



一大転換期になることになる。

その事件を東京事件と呼ばれることになる。

東京事件、それは数メートルクラスの比較的小規模のホールの出現から端を発した事件である。事件時に出現した孔はそれほど大きくも無く、またシドニーのように恒常的に存在したわけでもない。時間にして一時間も無かっただろう。その程度の短時間に現れ、消えてしまった。

本来なら、何の間違いも無く架空存在が顕現する先触れ（時折極少数の割合だが、架空存在を顕現しないままホールが消失してしまう事例もある）なのだが、いつまで経っても架空存在は現れない為、このホールは後者であると一般には思われていた。だが、確かに来訪者はいた。予想外の相手ではあったが。

インペリアルガーデン 皇居上空に出現し、一時間ほどで消失したホールは希人を運んでいた。

2001・01・01

新たな千年紀。この祝福すべき幕開けの日、人類は架空存在に対して乾坤一擲の大反抗作戦『Op・アイアン・フリスト』の発動を発令した。

・反抗作戦『Op・アイアン・フリスト』（日本名・鉄拳作戦）

## 作戦概要。

総反抗の先駆けとして、現在大西洋沿岸まで押し込まれた欧州の奪還を目指したもの。

・第一段階『Op・アイアン』（日本名・鉄作戦）

大規模陽動作戦。

目標である最大規模の3rd-Holeの周辺に存在するタワー群の攻略。

・第二段階『Op・フィスト』（日本名・拳作戦）

3rd-Holeの直下に存在するメインタワーの攻略及び、周囲の制空権の奪取ならびにその確保。

・第三段階『Op・アイアン・フィスト』（日本名・鉄拳作戦）

軌道上からの実用化に成功した時空潮汐爆弾（Space-Tide Bomb）の爆撃による時空間の封印凍結。

『アイアン・フィスト』はこの三段階からなり、破壊不可能だとされるホールを壊すのではなく封印することを目的としたもので、その為だけに半径五百メートルの空間を現在よりも六億分の一、時間の流れの遅い空間に封じ込めてしまおうという計画である。

結論から述べよう。

総兵力の約二十パーセントの完全喪失と引き換えに、作戦は成功した。

欧州各地に点在する主城に対する支城の役割を持つタワー群へ、損害に構わず総攻撃を行なった。勿論、架空存在は激しく応戦し、勇猛であり獰猛だった。それでも数日に渡る交戦は数学を用いるしかないという他に表現方法が無いほどの犠牲を生み出しながらも強引に第一段階『Op・アイアン』を遂行し敢行した。そして当時、欧州に存在した架空存在の大部分を吸引誘導することに成功した。その成功の裏に膨大と呼ぶしかない犠牲を出してもいた。メインタワーに雪崩れ込むまでに生じた被害が全体の七割を占めているほどだったのだ。

第二段階『Op・フィスト』に移行すると、制空権確保のため、後に空が真っ赤に燃え上がったと称されるほどの対空ミサイルを初めとする大小の対空兵器の大盤振る舞いにより局地的ではあるが一時的な制空権を奪取すると、間髪要れずに近接航空支援及び、中低空度の制空権確保を専門に開発された戦闘機部隊による制空権の確保の体制に入った。そしてその時点で、砲兵部隊による援護射撃の中で第三世代の強化外骨格を装備した機械化強襲歩兵部隊による空地同時のメインタワー攻略が始まった。

3rd-Hole直下に位置するメインタワーは地表部十五層、地下部三十五層の合計五十層の円錐形の構造体であり、タワー中心部は核となる柱が貫いており、その半径十数メートルは吹き抜けになっていた。一言で表せば、タワーは蜂の巣と蟻の巣を融合したような構造をしていた。地表部は蜂の巣であり、地下部は蟻の巣である。そして、その高さは地表部だけで五百メートルを超え、地下部をあわせると三千メートル近かった。

多大な犠牲を払いながらも機械強襲歩兵部隊が化地下部二十層目に位置するメインタワー中枢部に置いてマザーと呼ばれる架空存在を撃破し、それを司令部が確認した後、『S-T.T.B』の運用

母機として開発され、低軌道上に待機していた往還機は3rd-Hole目掛け、『S-T.T.B』を投下した。

変動重力圏はホールの周囲にリング状の形で存在し、ホールの直上及び直下に置いては地球の標準重力と変わらず変動重力の影響圏ではなかった。

なので、有線誘導によりある程度の高度まで誘導されると、接続されていた有線ケーブルを切断し、微小な誤差を修正しながら3rd-Holeと同空度に置いて『S-T.T.B』は正常に作動した。

作動した直後、極大の衝撃波が生まれ周囲に広がるとする瞬間、それが起きた。それを目撃したある兵士はこう語った。まるで映像を逆回転で視ているようだ。そう表現するのが一番適格だろう光景だった。

一瞬のうちに3rd-Holeを中心とする空間は半径五百メートルまで圧縮され、切り離された。その結果、フランスの大地に存在する3rd-Holeは時空間に凍結され、封印された。そして状況はマザーを撃破した時点で架空存在が一斉にユーラシア東部へ向けて撤退に移りそれが組織立ったものではないことから直に追撃から残敵掃射の段階に移っていた。

この段階になり最早人類側の勝利は確定し、今までの抑圧された恨みが一気に噴出したのか、苛烈なまでに架空存在を撃滅していた。

次々に撃破されていく架空存在。極一部の架空存在は死期を悟ったのかその場に踏み止まり激しい抵抗を行なったが大多数の架空存在は3rd-Holeに最も近く近隣最大の規模を誇る2nd-Holeへと一心不乱に驀進していた。その逃走というには激しすぎるモノを抑えきれほどの戦力を人類は持つてはいなく、包囲しつつあった囲みは散々に食い破られ、大多数の架空存在を逃す結果になった。

過半数に近い数の架空存在をとり逃すことにはなったが、それでも悲願だった勝利という形で幕を閉じた『Op・アイアン・フィスト』の終了後。

人類は安著した。

作戦の成功はもとより、漸く、人類は架空存在に対して決定打となる武器『S・T・T・B』を手に入れられたことに対してだった。だがこの作戦『Op・アイアン・フィスト』は成功しなければいけない作戦（失敗していい作戦など建前的には存在しないもの）であつた。

また、その成功の原因は奇策や偶然（それらも戦術レベルにおいては多少含まれていることは否定できないのだけれど）によってではなかった。

単純明快。人類はこの作戦だけのために、国連主導の人類軍が持つ総兵力の実に六割を投入したのだ。もしこの作戦が失敗していたら、現状維持していた戦線は一気に後退しその最前線は現在唯一無傷で確保されている最後の大陸――南北アメリカ大陸まで下がり二度と大規模な攻勢は行えないだろうとさえいわれていたほどの規模のものであり、そうしなければいけなかったという面言えば、どれほど人類が窮地に陥っていたかが分かるだろう。最早、この段階にいたつては民族やイデオロギーによる身内同士の闘争などという贅沢は許されないほどに状況は逼迫していたのだ。

2002・04・07

一年の準備期間を置き、総反抗作戦が決行される。

この日の為に、時空潮汐爆弾は最優先で量産され、その数は全てのホールに対応できるだけ揃えることが出来た。

そして突入できうる全ての戦力を注ぎ込み史上最大の作戦は決行される。当然その中には魔法少女の姿も存在した。

そして、遡ること数年前。

一人の少女が魔法少女に目覚めた時点からこの物語は始まる。

**Ep・00・a Prelude (後書き)**

少しでも楽しんでもらったのなら幸いです。

## Ep・01・Point of No Return

『いや、本当に、あの時は流石にもう駄目だと覚悟しましたよ。なにしろこっちは身軽なのが身上的偵察隊ですからねえ、それこそ百戦錬磨の重機動歩兵でもないから強化外骨格なんて洒落たもんは持ち合わせておりませんでしたし、中型の架空存在を相手するのも大変だつてのに目の前には両の指ほどを合わせたぐらいの小型や中型の架空存在で一杯だし、隊装備じゃ撃破不可能の大型まで現れて、そりゃもう内心じゃ戦々恐々としたもんですよ。しかも運の悪いことに基地から大分離れていて、救援を要請しても来る頃にはお陀仏つて、しゃれにならない状況でしたね。まあ、一応藁にも縋るなんとやらで報告のついでに要請だけは無線で伝えましたけど、それも直ぐに無線機が壊されて、司令部が何を言ったのかも聞き取れませんでしたよ。

まあ、危機を伝えただけ良しとしようじゃないか、何せ我々は偵察隊なのだ。これで義務を果たした、次は我々が暴れる番だ。そう強つて部下にいったものでしたよ。多分傍目からは強がりだつてバレバレだったでしょうね、それでも誰も笑わず聞いてくれました。何せ、私は隊長でしたからね、ただ震えていちゃ格好がつきませんでしたから。それに、きつと皆な分かつていたんですよ、自分達が生きて帰ることは出来ないだろうってことは、だから犬死なんてご免だったんでしょうね。はい、一合戦やりましょう、思う存分暴れましょう。そう言ってくれたんですよ。私は嬉しくて嬉しくてねえ、思わず泣き出しそうになりましたよ。部下達には頭が下がる思いです、本当にあのときはあり難かつたですよ。

そして、不思議なもので、その頃になるとちつとも恐く無くなりましてね、肝が据わったというんですかね、架空存在を一匹でも多くやつつけようと、そんなことばかり考えていました。勿論、部下



もハリキッテいましたよ。皆、架空存在がどういう存在なのか知っていましたがね、殺るか殺られるか、そのどちらかですから、生きたまま食われるんだったら、せめて人間らしく死のうと、そう想っていたんじゃないんですかね。私がそうだったから言うんですけどね。

でまあ、装備を整えて準備万端、さあ戦ろうかと言う所で、あの一撃が空から降って来たんですよ。圧倒的な一撃でした。あの逆立ちしたって勝てそうにも無い大型架空存在が一撃でやられてしまったからね。あの時は本当に呆気に取られましたよ。何が起きたのかわからなくて、ただ阿呆の様に空を見上げたもんです。そして、空には、人が居たんです。私達みたいな下っ端でも彼女みたいな存在の噂ぐらいは聞いていました。だから直ぐに理解しましたよ。魔法使いが助けに来てくれたんだって。

本当に嬉しかったですね、これで助かると思ってしまった。糸が切れたみたいにその場に座り込んでしまいましたよ。そして後で助けてくれた魔法使いが自分の姪と同年だって聞いたときは言葉では表現できない何とも奇妙な気分を味わったものですよ。ですからね、あの時のことは忘れられそうにありませんよ。

あ

る独立偵察隊隊長の証言。

『魔法少女もの』

Ep. 01・Point of No Return

太陽が隠れてから既に一刻ほどの時間が過ぎていた。

頭上、街の光によって夜空に星が昔ほど見えなくなっただけ、全く見えないというわけではなく、数少ないながら今夜も一等星が夜天に輝いている。

そんな戸張の落ちた夜の闇の世界に、流星と見間違っばかりの赤青二色の光の軌跡が二条、我先に争うように走っている。

その様子を眺めるようにしてみている人物が居た。

四捨五入すれば三十代。でもぎりぎり二十代。そんな年齢の男、青崎蒼司だった。

ノリの効いたワイシャツに、濃紺色の仕立てのいいスーツ姿の彼の瞳は愉しげだった。

その色違いの二つの軌跡は『重力？』なにそれとでも言わんばかりに、この世界に存在する絶対的なはずの理である物理法則を完璧に無視した、物理学者が寝込んでしまうような滅茶苦茶で出鱈目な機動を描いていた。直線だと思えば、次の瞬間にはほぼ直角に曲がり、すぐさま螺旋に変化する。そして時々、思い出したかのように真っ向からぶつかり合い絡まるように飛行している。それは、まるで舞踏のようにもみえるが、その実体はただの戦闘行為に過ぎなかった。

そのことを知っている青崎蒼司にとって、その幻想的といっている光景はむしろ当たり前のもので現実的なものであったが、それはむしろ、彼が普通（どう定義付けるかで如何様にも意味合いを变じることが可能ではあるのだけれど）ではないということを証明しており、通称・一般人と呼ばれる普通の人々にとってはその光景は異常ともいえるものだった。

「ふむ、この様子だと直ぐに片が付くそうだなあ……」

独り言を零すと、上着のポケットからタバコと愛用のジッポライターを取り出すと火をつける。

紫煙を大きく吸い込み、吐き出すと、もう一度頭上を見上げた。  
瞬間、タイミングを計ったように赤味がかった光を放つ片方から、  
夜の闇を引き裂くような閃光が放たれた。

迎え撃つように、対峙する青味がかった方からも同じような閃光  
が放たれる。

そして、ほぼ両方の中間地点で太い光線はぶつかりあった。

ほぼ力は拮抗しているようで、粒子状の光を周囲に放ちながら闘  
ぎ合い、一方を飲み込もうと出力を両方供上げるのだが、それもま  
たほぼ互角のようで、当然の帰結として均衡状態に陥る。

「派手だな」

気分は花火を見物している観客だろう。紫煙を燻らせながら、彼  
は眺める。

永遠に続くかと思われたその均衡は、予想以上に早く崩れ去った。  
墜落していく二つの光点。

一方の青い光の方は直ぐに空中に留まり、静止したが、もう一方  
の赤い光の方はどんどん勢いを増し地表へと落下していく。  
それを見て、

「ッ！」

忌々しげに舌打ちを漏らすと、携帯用灰皿にフィルターまで燃え  
尽きた吸殻を押し付け、すぐさま青味がかった方の光点へと向かう  
為、急いで十五階建てのマンションの屋上から、夜の世界へと躊躇  
うこと無く踏み出した。

その日が来るまで、日向あすはは極標準的な小学生だった。特に平均から逸脱するようなものはなく、運動が得意科目ではなかったものの、それも平均的小学生の水準だった。

その日、彼女は運命と出会った。

大抵、人生の岐路というものは誰も予測しうることはほぼ不可能なほど突然に起きるものだ。

彼女の人生の岐路もまた、突然だった。

始まりは一匹の傷ついた猫を助けたのが切欠であり、全ての始まりだった。

あの日まで、日向あすはは何処にでも居るような平凡な少女だった。だけれど、今現在の彼女は到底普通とはいえない対極の存在になっていた。

簡単に言ってしまうえば彼女は何の因果か、魔法少女と一部では呼称され、カテゴリされる存在になっていた。

特別天然記念物とも生きる奇跡とも極一部では呼ばれる本物の魔法少女である日向あすはは物理法則が正しく働いていることを世界に証明するように、地面に向かって落下もとい墜落している。

その身に纏っている最新の材料工学と錬金術と呼ばれる技術の粋を凝らして作られたコスト度外視の、耐衝撃、耐熱、耐弾など考えられる限りにおいて当代最高であり最優・最良の性能を有した素材、それによって作り上げられた趣味に走ったと疑われてもおかしくない機能的見地から見でははなはだ疑問の残るデザインのアンダーサイズに装備されたマジック・マテリアル・ジャケット・アーマー（通称MMJA）、これまた趣味に走った気のある魔法のステッキ型出力デバイス（勿論、音声入力型）でも、今現在のガス欠状態の彼女には高度数百メートル上空からの落下による衝撃では無事にすまないだろう。

彼女もそのことを理解している。そのせいで、どうにかしなくちゃと焦る気持ちが見事に空回りしていた。

万全の体調であれば、このような状況は飛行能力を有する彼女には危機ともいえないのだが、今の彼女にとっては危機以外の何物でも無く、打てる手は存在しなかった。

見る見る間に近づいてくる地面に、思わず目を閉じ、デバイスを握る手が強張る。

硬く閉じられた瞳、直ぐに来るだろう衝撃を想像し、震え、死の恐怖に怯えていた。

「……………?」

何時までたつても衝撃が無いのを不思議に思い、勇気を出して恐る恐る瞳を開けると、

「ふえ!?!」

そこには見知った顔が間近にあり、辺りを見回すと、普段見慣れている視界よりは高いもののそれほどの高度でないことに気付き、次いで自分の今の状態に気付き、一気に顔が朱に染まり上気させた。今の彼女は俗にお姫様抱っこと呼ばれる状態だったのだからそれも仕方が無いといえた。

「ふえっ、ふえ」

ほつとする反面、それまでの張り詰めた糸が切れたのか、見る見る間に大粒の涙が大きな瞳一杯に浮かび上がり、

「ふええええええええええんっ!」

盛大に泣き出した。  
困ったといわんばかりの表情を浮かべ、青崎蒼司は頭をかいた。

\*

ふわりと地面に降り立ったのは先ほどまで青い燐光を発していた方の神楽イスズだった。

彼女はあすはと同じ年の十一歳の小学五年生ではあるけれど、魔法少女の仕事に就き既に二年が経過しているあすはの先輩だった。イスズは泣き疲れて何時の間にか寝てしまったあすはを見ると、その傍らに立っていた蒼司にその視線を向ける。

「……大丈夫ですか？」

その声は少女には似つかわしくない淡々としてもので、浮かべた表情もまた、能面のように無表情だった。それでも、彼女があすはのことを心配していることをそれほど短くもない付き合いの蒼司は充分に理解し、知っていた。

その端正な顔立ち、眉の上で綺麗に切りそろえられたつややかな光沢のある黒髪、それらが互いに合わさりあい、まるで日本人形のような印象を人に与える。それは神楽イスズという少女が持つ魅力の一つではあるかもしれないが、無機物のように冷たいものだ、そう錯覚し誤解される危険性が高いことを意味し、彼女の容姿、何を見ても微動だにしない様子、そして彼女が放つ冷厳な雰囲気それぞれに拍車を駆ける。

だが、青崎蒼司は彼女　神楽イスズ　が何処にでも居るような少女であることを知っていた。子供が本来持つべき、色鮮やかで

豊かな感情を彼女は持っている。ただイスズは感情の表現が人よりも苦手であるだけで、別段冷たいというわけではなく、友達が傷つけば胸を痛める、そんな何処にでも居るような優しい少女だった。

「ああ、ただビビッて泣いただけだ。普通だよ。お前みたいに泣きもしないで淡々とやれるほうがよっぽど珍しいよ」

「それ、誉めていますか？」

「どうか、どっちだと思う？」

目を細めると、意地の悪いことを蒼司は言った。蒼司との付き合いの長いイスズは慣れたもので、いつもどおり返す。

「誉められているのなら嬉しいです。違うのなら哀しいです」

言葉の内容とは裏腹に、その顔は先ほどと同じ無表情。だが、その内側は言葉通りで多少のからかいを含んでいた。

「勿論、誉めてるんだよ。だがまあ、手のかからない子供は子供で、何か物足りないものがあるから不思議だな」

気分は優等生の子供を持つ親。もう少し、一人寡婦を堪能したいな、と考え、何故かばつが悪くなった蒼司は、頭を掻きながら頭上を見上げた。既に結界は解かれており先ほどとは濃淡の違う夜空が広がっている。

「さて、と。今日の訓練はこれで終了だな」

「ええ、本日の練習プログラムは全てこなしました」

同意の返事をイスズは返す。

何時の間にか武装解除したのかイスズの格好は既にあすとはデザインの違うMMJ Aから、普段着の白のシャツに、黒のベスト、そしてベストと同色の黒いロングスカートといった格好になっており、月光以外の光源のない夜の闇に良く映えた。そして胸元にはデバイスを転送させるための首から下げたクロス型の召還機が月光を浴び仄かに輝いている。

蒼司はイスズに難しい表情を浮かべた顔を向けた。

「だとしたら、目下最大の懸案事項は」

そこで蒼司は視線をあすはに向ける。

「こいつをどうするか、だ」

視線の先のあすはは幸せそうに寝息を立てていた。

\*

霞ヶ関の一角に存在するそのビルは、特徴と呼べる特徴が無く、見事に周りの風景に埋没していた。

その雑居ビルは一般では理解しにくい名称の財団法人の管理下にあるが、その実体は国連の機関・TOC (Team Of Counter measures against Catastrophe) の日本支部『日本TOC』の本部であり、露出している十階建てビルの地上部分よりも地下施設の方が広大であり、青崎蒼司



が現在居る部屋もまた地下にあった。

その部屋の中央にはマホガニー製のワークデスクが鎮座し、その背後には窓がない代わりなのか空と海が前面に描かれた大きな絵が飾られている。そして部屋の主であり蒼司の上司である美嶋玲香が蒼司と相対していた。

玲香は昨夜の訓練の報告を蒼司から受けていた。

蒼司の報告を聞き終わると、一つ息をつき、額に手を当てて瞳を閉じた。

そしてゆっくりと瞳を開くと、目を細め蒼司を見る。

「つまり、日向あすはは実戦に出すのに十分なレベルに達したと、そう貴方は判断するのね」

「ええ、まあ。条件付きで、ですけどね」

蒼司はあっけらかんと同意の返事をする。その言葉にピクリと彼女の細い眉を動かした。

「その条件、訊いても良いかしら？」

微笑を一つ浮かべ、彼女は訊ねた。その瞳は好奇心を隠そうともしない。

「もちろん」

「じゃあ、訊きましょう。その条件とは何？」

こほんと一度咳払いをすると、蒼司は口を開いた。

「サポート要員としての神楽イスズの同行ですね。但し、日向あす

は本人には内緒ですが」

彼女は彼の言葉を聞き、少し思考する。

要するに彼女の保険ということね、それに実践参加も訓練期間終了の実技試験ということだろうし……。ええ、ええ、それが好ましいでしょう。慎重は一度では無く幾ら重ねても問題ないですし、特別魔法戦技官は宝石よりもさらに希少ですからね、用心にこしたことはないです。大切に、じっくりと物にしましょう。子供の頃かっていた小鳥のように……。それに他にも色々とありますし……。ね。そして、

「いいでしょう。最初が肝心ですからね」

要請を許可した。

幾つかの思惑があるのは疑いようがないけれど、敢えてそれを訊くことはない。何せ、両者が両者供同じように、策を要するタイプ、つまりは似たもの同士だった。なので、そんなことを口にするはずないのを理解しているので、野暮以外の何物でもなかった。そして、思惑がどうあれ悪くはないだろうと、彼女はそう判断している。なにせ、今この部屋に居る二人は、疑いようの無い愛国者であり、また心の底から架空存在という存在を忌み嫌っているのだから、当然だった。

「まあ全くの初陣というわけではないですけどね」

日向あすはが魔法少女になることに成ってしまった出来事を思い出し、彼は笑い声を滲ませ言った。

「イレギュラーはイレギュラーであり、以上でも以下でもないわ。手順どおり物事をこなすことがベストの選択です」

「ベターではなくて？」

「場合によりけりでしょうね。彼女の場合は今の方法がベストのはずですよ。少なくとも私はそう信じています」

「同感です」

壁にかかっている時計をちらりと横目に見た。丁度短針と長針が一字に並んでいる。

美島玲香は多忙な人間であった。なので、この後も用事は多々あり、そうそう一つの案件に時間を取ってられない。なので、これで話を打ち切った。

「さて、と。では、話もここまでとしましょうか。装備課で必要な装備の受容をしてください。話は通しておきますから、煩わされることも無いでしょう。では蒼崎蒼司一等教導官。義務を果たしてください。以上です」

\*

日向あすはの初任務は突発的なもので、本人も予想がつかないものであった。

その日、定期訓練の他の特別魔法戦技官との共同訓練に参加するためにある基地に立ち寄った際の出来事。

富士の裾野に存在する鬱屈とした樹海に訓練と兼用した定期パトロールに出たある偵察隊が、架空存在発見の無線報告を一方的にしたあと、幾ら呼びかけても応じないことから危機的状況に陥ったと

司令部は判断。大型架空存在出現の報告により、可及的速やかに大火力を有する部隊の派遣することを決定する。そして、その派遣戦力に基地内で最大火力を持ち、即時展開能力を有する日向あすはに要請した。

「いいか、偵察隊の大体の位置は判明している。基地から東に二十五キロほど行った地点の近辺だろうと推定される。それを裏付ける材料として、極微小ながらも付近で次元震が観測されイーテル粒子も検知された。貴官は速やかに現地に存在する部隊の救出及び、架空存在を殲滅して欲しい。優先順位は部隊の救出である。我ら日本TOCは決して見捨てない。何があるうとも、だ。それは貴官も例外ではない。そのことをくれぐれも弁えてくれ」

きつちりとした軍服を連想させる制服姿の基地指令は、あすはに対し要約した状況説明及び、訓示をした。

その顔は真剣であり、剣呑といってよいほどだった。

彼の内心では年端も行かない少女を戦場に出すことによる葛藤が渦巻いていたからである。彼自身、あすはと同年代の娘を持つ親として、一人の大人として、彼女のような存在は導き護るべき対象でこそあり、護られ頼るべき対象ではなかった。それでも、今現在、彼女以外に誰も偵察隊を救うべき存在は居なかった。苦渋の選択である。

「はいっ！」

真っ直ぐな瞳で基地指令を見、あすはは元気良く返事をした。恐いという思いが無いわけではなかったが、それでも護りたいという思いのほうが強かった。

手首に装着していたブレスレット型召還機『アカツキ』に呼びかけた。

「初めての仕事だよ、あっちゃん。がんばろうね!」

『Yes , My Master』

アカツキは己の小さな主に返事を返す。そして、機能を起動させた。

『Change , Assault form』

あすはの頭上に直径一メートルほどの魔方阵が二つ現れ、ゆつくりと下りてくる。そして、その魔方阵が通過していき、それまで着ていた格好から黒色のアンダースーツ、そして高機動戦用MMJAへと変化していった。

あすはは、自分の装備を確認すると、前方に展開されている先ほどのものより一回り小さいもう一つの魔方阵に腕を伸ばし、其処からあすは専用出力デバイスを取り出す。

「特別魔法戦技官・日向あすは、出撃します!」

背筋を伸ばし、敬礼した。その場に居た全員がそれに返礼する。

そして、MMJA及びデバイスに魔力を流し起動させる。デバイスのコアに『M・W・S』の文字が浮かび、あすはの周囲に赤く輝く粒子が現れフィールドを形成する。そのフィールドにより、あすはは空を駆けることが出来る。

基地指令以下、その基地に勤める者総出の見送りへ受け、あすはは初めての戦場へと出撃した。

赤い軌跡が、宵闇の空を駆ける。

基地を出撃してからそれほどの時間もかからず目標地点へと到着した。

空中には架空存在の姿は見えない。幸いなことに飛行している架空存在は居ないようだ。

地上に目をやると、夕陽を浴びた蠢く影が複数確認できる。あすははアカツキに付近の探索を命令し、自身も目を凝らし、地上の様子を眺める。

小型架空存在といえどもその大きさは平均で二メートルを超え、中型架空存在では十メートル近く、大型架空存在にいたっては、一番小さい部類にはいったとしても十メートルを軽く越す巨体だった。そんな架空存在の群の中で孤立する偵察隊を発見するのに指して時間は必要なかった。

「あすは、一番大きな架空存在が確認できるか？」

蒼司の声があすはの耳元で響く。日本魔法技術総合研究所（通称・日本魔技研）製イヤリング型通信機『颯』によるものだ。

「はい」

「じゃあ、それを手荒く狙え。今の高機動戦用から砲撃戦用にフォームを代えたら、最大の火力の一撃を叩き込んでやれ。訓練どおりやれば出来る。大丈夫、努力は裏切らない」

「はいっ！」

あすははアカツキを起動させ、アサルトからバスターヘフォームをチェンジさせる。

『MMJ A Type ? Assault , Purge .  
Change , Buster form』

それまで身に付けていたMMJ Aがアカツキの音声に反応し、パ  
ージされ、先ほどと同じ魔方陣が展開され、今度は砲撃戦に特化し  
たMMJ Aを身に纏う。

「あっちゃん、デバイス展開！」

『Yes , My Master』

槍状のデバイスの先端が二つに分かれ砲口を形成し、羽のような  
形状の排熱板が二つせり上がり大気中のエーテルを浴び、放出口か  
らは余剰粒子が放出される。

あすははMMJ Aに存在する魔力回路を通じデバイスに自分の魔  
力が流れていくを感じる。マグマのように熱く滾り、鼓動を打つ。  
砲口を一番大きな架空存在に向け、アカツキによる微調整の指示  
に従い構えた。

全身に纏う、バスターフォームのMMJ Aが赤く発光する。

『Countdown Start , 3』

緊張してないといえは嘘になる。震えていないといえは嘘になる。

『2』

それでもあすはは逃げない。逃げ出さない。ただ訓練を思い出し、  
デバイスを強く握り締める。

『1』

あすはは目蓋を閉じ、深き息を吸い込みゆっくりと吐き出し、深呼吸をする。

そして、

『0』

目を見開き、

「ファイエルっ！」

撃った。

瞬間、あすはの身長よりも一回り大きな光線が砲口から放たれた。それは一条の光跡を描きながら、大型架空存在へと突進する。

標的とされた架空存在は何が起きたのか理解する暇も無く一条の光線によって蒸発した。

それは随分と呆気ないものではあったけれど、その瞬間、偵察隊の隊員は確かにあすはに助けられた。それは事実だった。

無事、大型架空存在を討つ事が出来ほつと胸を撫で下ろした。その瞬間、確かに隙が出来た。初陣だというのは言い訳にならない。ただあすはが甘かった、それだけだった。そして、その隙を見逃すほど、架空存在は甘くは無かった。

飛行可能な甲虫型の中型架空存在の一匹が、混乱からいち早く脱すると、翅を羽ばたかせて襲撃者に襲い掛かった。

『Master！』



アカツキが警告を発する。

「……っ！」

あすはは、はつと振り返るが、最早遅く回避不可能な位置まで来ていた。おまけに今の装備は鈍重なバスターフォームだ、回避する努力はただ虚しいものであった。

架空存在の鋭角的な角が目前に迫る。

それは黒色の流線型の外殻と合わさり、砲弾のようであった。またその威力は単純に重砲のそれを超えている。

MMJAに内蔵されていた防御プログラムが発動し、緊急展開された防御フィールドのお蔭で何とか最初の一撃は凌いだが、衝撃自体は吸収しきれず、胸から肩の部分のMMJAが吹っ飛ばされた。

「……！」

地上から蔭ながら見守っていた二つの影、その片方である神楽イスズはあすはの危機に思わず飛び出そうとした

そしてそれを蒼司は止める。

イスズは蒼司を睨むが、睨まれた蒼司は首を横に降った。

「この程度は危機とも呼べん。それよりも今の最優先事項は偵察隊の援護だ。まだ架空存在はのこっているからな」

蒼司の言うことは最もであることをイスズには理解していた。大型架空存在が始末されたとはいえ、偵察隊にとって今だ脅威といえるほどの数の架空存在が残っていた。

特別魔法戦技官がたかが中型架空存在一匹にやられるようでは話に

もならず、これから激化するであろう戦闘で死なないまでも取り返しのつかない負傷を負うこともありえるだろう。もしかしたら死んでしまうかもしれない。なのだから答えは自ずと明白であり、優先すべき順番は明瞭である。それでも、理解と納得は別の話ではあった。

「イスズ、義務を果たせ。あすはなら大丈夫だ。お前と同じで強い子だからな」

頭を撫で、蒼司は安心させるように言った。

「……蒼司さん、ずるいです。そんな言い方されたら何も言い返せないじゃないですか……」

俯くイスズはぼつりと呟く。

苦笑一つ漏らすと、蒼司は両手に手袋をはく。

二三度手を開閉させ、具合を確かめると、手袋に内蔵されている魔力回路に魔力を流した。仄かに白色の燐光が灯る。

そして蒼司は戦場へと赴く、それに付き従うように近接戦闘用に特化させたブレードフォームを装備したイスズが後に続く。

そうしてその瞬間から、後に第四次富士突発遭遇戦と呼称される戦闘は終末段階である殲滅戦へと移行した。

空中。

既に太陽は隠れ、夜の闇が世界を侵食した。空には満月というにはやや欠けているがそれでも尚、大きく月が浮かび、大気が汚染されている都市ではありえないほどの星が姿を現していた。

空を駆ける赤い軌跡。その前方には本来生態系には存在しないはずの巨大な甲虫が下手な戦闘機よりも早く飛行している。

「つく」

呻き声を漏らしながらもGに耐え、ほぼ直角に曲がる。

「あつちゃん、バスターからブレイドへ、腕部限定変更！」

既にMMJAの大部分は外れ、致命傷となりえる部分のみ装備しておりそれ以外の部分はアンダースーツが露出している。本来なら高機動戦用のアサルト、若しくは近接戦闘用のブレイドにフォームを変更したほうがいいのだが、その暇が無く、また上記二種よりもバスターのほうが単純な防御力は上だったのが幸い中の幸いだった。

『Yes , My Master !      Change , Blade form to an Arm limitation  
!』

高速移動しながらも腕部に装備していたMMJAをパージし、出現した魔方阵により新たなMMJAが装備される。それは箆手のような外見をしたブレイドフォーム用のMMJAだ。

前方の架空存在を無視し、月目掛け一気に駆け上った。そして月を背後にし、架空存在に対して強引に振り返る。

「あつちゃん、頑張ろうね。多分、これで終わりだから      !」

あすは目掛け突進してくる架空存在を眼下に納め、デバイスの設定をバスターからランスに形態変更させる。

それまで砲口だった部分から高出力の刃が伸び、全長二メートルを越す長槍に姿を変える。後部、石突き部分は扇形に広がり、推進用の魔力を放つための放出口に姿を変化させる。

あすははデバイスを見、準備が整ったことを確認する。

逸る鼓動。流れる汗。少しでもそれを押さえるため、一度、息を大きく吸い込み深呼吸をした。

脳裏には昨夜の訓練の記憶が蘇っていた。

全力の打ち合いで負けた記憶。

あの時の落下は本当に恐かった。何にも出来ない無力感をどうしようもないほど思い知った。けど今は違う。あの時は魔力量がすっかり無くなってしまった。だけど、今はまだ半分も残ってる。それで充分。ありすぎるほどだよ。それに、イスズちゃんに比べたら、全然恐くない！ だから、大丈夫。全然平気なの！

両手でデバイスを握り締め、煌く光刃を架空存在の中心に向け構える。

『C o u n t d o w n   S t a r t   ！』

狙うは真芯。

『3   .   2   .   1   』

淡々と刻まれるカウント。脈動する鼓動がそれと一致する。

『0   』

「アカツキ、オーバードライブ！ トッカーンッ！」

声が重なった瞬間、爆発がデバイス後部、柄の部分から起きる。殺人的な加速。それを無理矢理フィールドで和らげ推進力にし、放たれた一つの鏃の様に突き進む。小手先の技を一切無視した直線的機動。相対速度は先ほどの追いかけてこの比ではない。ゴマ粒ほどの大きさだった架空存在が直ぐにあすはの数倍の大きさに変わる。

あすはは細かな技術を持っていない。持っているのは才能といってさえ良い、豊富な魔力量。そしてそれに相応しいだけの出力。それらを最大限生かすのが、言ってしまうえば単純明快ただの突進。あすははそれを本能から察知し、それを最大限生かす為の準備を整え、今実行した。そして、その成果は直ぐにでる！

それを止められるのはそうは居ないだろう。たかが架空存在、それも中型が止められる道理は寸分も無い。

純粹な力こそ、対抗するのが困難であるという事実。もてる最大戦力を用いた一点突破。それを耐え抜くものを架空存在はもっていなかった。

そして、架空存在の強固なはずの外殻を突き破り、突き進み、架空存在を突き抜けた後数百メートル以上疾走し、止まる。

我に障害何も無し。そう言っているように、誇らしげにデバイスの各部から白い蒸気を放たれる。

「終わった……」

ポツリとあすはは眩きを漏らす。

『Mission Complete』

アカツキはあすはに応えるように、労うように、そう言った。

「……うん」

緊張が解かれたのだろう、張り詰めたものが切れ、先ほどとは比べようも無いほど締まりの無い顔つき。それこそが、本来のあすはだった。

「そのまま帰るな、一旦下<sub>二</sub>に下りて来い」

その時それまで沈黙を護っていた通信機が予告なく、己が機能を果たした。

地上に降りる。

目の前には青崎蒼司が居り、その傍らには侍女のように付き従うように神楽イスズの二人が居た。

イスズがいるという予想外のことに素直にあすはは驚く。

「あ、蒼司さん」

とてとてと小走りで蒼司に向かった。

「まずはおめでとうと言うべきか、な？ だけれど」

最初はにこやかな微笑、そしてそれが怒りへと変化する。

「お前は任務の何たるかを自覚していない。これは叱ることだ。だからこそ、今回のことはプラスマイナスで言うマイナスだ。何故に分かるか？」

突然の叱責に戸惑い、次いで理不尽なことに対する怒りが沸きあがりながら、ふるふるとわけもわからず首を振る。

「大型タイプの架空存在をしとめたまでは良かった。そこまでは誉める。だが、其処からがいけなかった。しとめたことに安心し、警戒を怠ったことが減点。そして何より、お前は目先の敵にかまけ、優先順位を見失っていた。もし、お前しかいなかったなら、救援対象である偵察隊は全滅とまではいかないまでも、かなりの被害が出

ていただろう。それは何故だ？ 簡単だ。お前は架空存在が群であることを忘れていた。だから、俺は誉めない」

これが答えだというように、背後に築かれた架空存在の死骸を見せる。

今だこの世界のその存在が確立されていなかったようにで架空存在の死骸は崩壊を始めており、徐々にエーテル粒子に姿を変え、元から存在していなかったように世界に消えていつている。

一方的にそう告げると、蒼司は踵を返し、森へと姿を消す。その後姿をにじみばやけた視界から直ぐに消えていく。

大きな瞳一杯に涙を浮かべ、だけれど、唇を噛み締め、あすはは泣くことを我慢する。

ドキリとした。自分のせいで、人が死んでいたかもしれない。それを思うと泣いちゃいけない。絶対に。

「……………」

イスズはあすはの様子を見詰め、少し昔の自分を思い出していた。あの時も、蒼司さんは何も知らずただ先走った私に、同じようなことを言った。反発もしたし、納得もした。だからこそ今の自分が在る。私は蒼司さんの気持ちを知っている。だから、私は見守ろうと思う。自力で乗り越えてこそ意味があるから。

その日、イレギュラーな存在であつた日向あすはは、己が立場の持つ義務と責任の何たるかを僅かながらも理解した。そして、それが後に大きな財産となる。

\*

数日後。

美島玲香は報告書を受け取るとざっと目を通した。

「戦果が大型と中型が一体ずつ、ね。      素晴らしいわ!」

ブラボーとさえ言い出しかねない、手放しの賞賛。そして初陣での戦果だとしたら、それは賞賛こそ相応しい成果だった。本来大型架空存在を討伐するためには戦闘爆撃機中隊一個から二個の爆撃か、一個特化連隊による一斉砲撃並の火力が居るのだ。

「まあ、彼女には期待していますからね。このぐらいは当然とさえいえます」

我が事のように、蒼司は顔をほころばせる。

「でも、あまり無理はしちゃ駄目よ。素材を生かすも殺すも料理人の腕次第。つまりは特別魔法戦技官を育てるのは教導官たる貴方の腕次第。私は貴方があの子に期待をかけるのと同じぐらいには期待してるのよ」

「ええ、努力しますよ。こんな状況下で頑張らない奴は居ないでしょう」

「まあ、そうね。でも足掻かなくちゃいけないの。あの日、世界の崩壊を目撃した者にとっての義務よ」

「ええ、ええ。そうでしょうとも。今こうしているのがその証明でしょう」

「そうね、絶望から立ち上がらなかったものは居なくなってしまう



たものね……」

しみりとした空気が流れる。あの日、真紅に燃える空を眺めた者の背負う義務。それはあまりにも重いものだった。

「じゃあ、そろそろ失礼します」

耐えかねたのか、蒼司はそれだけ告げると背を向ける。

「近い未来のエースである、あの子によろしくと伝えておいて」

「ええ、伝えておきます」

そうして部屋を出た。

本部の地下には訓練用施設があり、その一角には職員用の食堂が併設されていた。

その食堂は安価で美味しいと評判で、毎日繁盛していた。

その時刻は、込み合う時間を外しているせいかな人の数は少ない。

掲示板の近くの席に幼い人影が二つ。定期訓練に来ていたあすはとイスズの二人だった。

「ふう、今日もダメダメだよ」

とろとろ半熟タマゴタイプのオムライスののったお盆をテーブルに置く。

「でも、前よりいい動きだよ」

キツネうどんの載ったお盆をあすはの向かい側テーブルに置きながら、イスズは言った。その言葉はお世辞では無く、本心からのものだった。

あすはは数日前よりも格段に動きがよくなっていた。それは実戦を経験したせいだろうか、いえ、違うわね。直ぐにそれを否定する。あの言葉のせい。多分、きつと。

その時、二人の召還機が同時に鳴った。

それは呼び出しのコール音だった。

二人はまだ口をつけていない食事を名残惜しげに一瞥し、直ぐに駆け出した。その顔は義務の何たるかを僅かながらも知っている者の顔だった。

## Ep・01・Point of No Return (後書き)

この章は以前投下したことのある短編です。次章から未公開ぶんです。

少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです。

Ep. 02. Case of him. / Case of her.

規定年数の経過による機密指定解除文書より。

EUTOC / 英国TOC / TRSOUW / 報告1999 / 04

『AM計画』の定期進捗報告書より一部抜粋。

?	03	?	A7	?	02	?	03A及び、	英TOC法令	S
---	----	---	----	---	----	---	--------	--------	---

以上を遵守の上、閲覧すること。

閲覧資格。

- ・ 一等法務官以上及び、それに準じる資格を得ている者。
- ・ 『AM計画』関係者。

以上の条件を共に合致する者にのみ許可。

発： TRSOAW内、『AM計画』担当管理官。

宛： 関係各位。

主題： 架空存在に関する対応兵装。

・概略。

TRSOAWは英国TOC指導部『円卓』の要請により、対架空存在用特殊兵装の開発及び試験を昨年十二月末より開始し、その予備設計を完了したことをここに報告する。

・現状。

我が英国TOCは20XX年度のEUTOC定期連絡会議の結果により、EUTOC内において対架空存在用特殊兵装の開発の部分においては独自路線を歩むことを決定した。これは、同じくEUTOCを形成している独逸TOCも同様のことである。

何故なら、EUTOCが現在有する対架空存在用通常兵装は架空存在に対して著しく不利であることは否めず、また共同開発計画は遅々として纏まらず、進まない現状においてこれは当然の帰結である（これは復古主義としか言いようのないフランス人のまことにフ

ランス人としか言いようのない頑迷さが大いに影響しているのは間違いない。

故に仮称名称『A M』は損害著しい英国T O C実働部隊の切り札となるモノになるであろう。

またこの開発には独逸T O C開発局第参課『アーネンエルベ』との共同開発が提案され、技術面及び予算面の結果、それを受け入れることに決定した。

#### ・架空存在の動向。

大まかに三つにカテゴライズされる架空存在の中で、当て嵌まらない存在である第零架空存在は××年前の報告例を最後に現在まで報告されていない。これは、あの約束の日まで現れないだろうと予測される。事実、以前はそうであった。

通常の架空存在はそれに反し、近年出現率が急激に増加している。これは世界の歪みからくるものと推測され、それを裏付けるように空間に占めるエーテルの増加が確認されており、早期の抜本的対策が急務である。

#### ・現状の対策。

A Mの開発状況はアーネンエルベとの共同開発により、当初見積もりの三十パーセント増しの開発速度であり、また独逸T O C独自の技術も盛り込んだため、当初計画よりも質が向上し、全般的の予

定を上方修正している。また、『xxxx・xxxx』から提供された献体NO.02『xxx・xxx』の献身的協力により、完成度は着実に向上していることを追記しておく。

それでも直ぐさま開発が完了するわけではないので、当面は現有装備の改良及び新規開発、部隊練度の向上などで対応しなければならぬだろう。

今は耐えるべき時期ではないかと、そう考えられる。

TRSOAW『

AM計画』担当管理官

ウィリアム・ク

ラーク

(xで塗り潰している部分は今もって機密

指定を解除されていない)

『魔法少女もの』

Ep.02・Case of him・/ Case of her・

あすはの初任務から既に一ヶ月が経過し、季節が秋から冬へと変

化していた。

その間、しとめた架空存在の数は大型を含め十匹を超え、エースと呼ぶに相応しいまでになっていた。それでも、あすはの先輩であるイスズに比べると格段に少ないが、充分に賞賛に値する成果ではある。

この日も、一週間ぶりに現れた架空存在を退治するために戦っていた。

あすはは疾駆する。身に付けるMMJAは近接戦闘用であるブレイドフォーム。手には放出口を変形させたデバイスが握られ、光り輝く光刃を展開している。

前方には狼型の小型架空存在が二匹。幾ら小型とはいえ三メートル近い巨体は、十分な脅威ではあったが、それを歯牙にもかけず、あすはは大上段から勢いよく光刃を切り下ろす。

「えいつ！」

『Accelerator on』

その言葉を合図に、MMJA及びデバイスは推進用の魔力を放出し加速する。

電光石火の勢いで振り下ろされる切っ先。

架空存在は反応するのが限界で、回避動作すら行なう余裕さえない。

正に一刀両断。

その言葉通り、胴体から二つに別れ、狼型の小型架空存在は悲鳴を一声上げると、傷口から徐々にエーテルの粒子に変わり、名残惜しげに大気に消えていく。

あすはは気を緩めることなく、もう一匹の架空存在に切っ先を向



けかまえる。

相對する二対四個の眼光。

一種の均衡状態が訪れる。

あすはは意図的に自分から動くことで、それを破ろうとした。

内心でカウントダウンを始める。

(3・2・1・0！)

駆ける。初速からトップスピードまでのラグはほぼない。これは瞬発力を重点的に強化しているブレイドフォーム故の芸当だ。

先ほどとは違い、下段から切っ先を切り上げる。

地面を抉り、土埃を上げ、光刃が喉仏深く切り裂く、その刹那。

架空存在は一発の弾丸に撃ち貫かれた。

\*

半径一キロメートルの範囲の中で一番背の高いマンションの屋上。普段誰も来ないのだろう、外装の隙間から雑草がたくましく生えている。

その無人のはずの場所に人影が二つ。

男と女だった。否、男と少女と言ったほうがいいかもしれない。

男の方は三十代を越えるかどうかの年齢に見える白人男性であり、百九十近い長身、癖のない金髪、碧眼の持ち主である。女の方は少女と呼ぶに相応しい幼くあどけない容姿であり、ビスクドールを思わせる白い肌、少しくせのついた銀色に近い金髪。人の目を引かずには居られない容貌であり容姿。だが現在、それ以上に人の目を引くだろう物が少女にはあった。それは、少女には不釣り合いな無骨

な鉄塊だった。少女はそれをお気に入りのティディベアのように抱いていた。

鉄塊の正体は英国T O Cが対架空存在用に開発した人間が運用するのは不可能な代物である30mm対架空存在用ライフル「E z 8」。

無論、生身の人間が扱えるような代物ではない。少女よりも遥かに大きなE z 8を構えるそのシルエットは、不条理なほどアンバランスである。だが、男はそれを気にしない。

彼は少女が如何に不条理な存在であるかを知っているからである。

「A T E弾、リジエクシヨン」

感情の籠らない無機質な声が、少女の口から洩れる。

少女の腕ほどの太さもある空薬莖がE z 8から排出され、空虚な音をたてながら、コンクリートの上を跳ねあがり、転がる。

思わず、男は口笛を吹きだしたい衝動に駆られた。

なんとも奇妙な世界に迷い込んだものだ。

この素晴らしい世界で、何とも不思議なことを、上層部の老人達は、当然至極な手段で、これを実現したのだ。これほどブラディなこともあるまい。

眩暈がするほど、それは彼の中の何かに訴えかける情景であった。もしも、何の事情も了解せず、ただこの光景を目撃したならば、彼は間違いなく絶叫を上げただろう。それほどのものがあつた。

彼は思考する。神は死んだと、どこかの誰かが言っていたが、それは正しいのかもしれない。いや、違うな。直ぐに彼はそれを否定した。神は居るはずだ。何せ、人を惑わすのは神様の得意とすることだろうからな。うん、そういう意味じゃ、悪魔も同じようなものかもしれない。さしずめ同業他社とでもいえばいいのかな？

彼は善良とっていい人間であった。敬虔なプロテスタントであり、日曜日にはかかさず教会に行くような人間であった。

そんな彼の感性において、彼女のような存在は容認も許容も出来

る物ではなかった。それでも、まことに英国人らしい、現実主義的観点からは彼女のような存在が必要であり容認できることも理解している。要するに彼女という存在そのものが必要悪なのだ。だが、納得となればまた別の問題でもある。

二律背反する感情。うねりをあげて二重螺旋を描き、渦巻いた。彼は記憶の中と何一つ変わらない少女の姿を一瞥し、視線を外す。いまだ慣れはしない、か。

声に出さず呟くと、ため息を一つつく。

彼は数日前のことを思い出す。それは、彼が現在ルーシア大陸の東の果てにへばり付くように存在する弓状列島に存在する国に、現在居る理由になった出来事である。

辺りは霧に包まれているので、朧にしか辺りの光景を見ることは出来ない。

時刻は既に夜半、おまけに今は十一月の末である。正に倫敦といつてよい風景が車窓を流れる。

運転手は成れたもので、フリート街、テンプル・バーを通り抜け、ウエスト・エンドに入る。目的地はソーホー・スクエアの一角に存在する邸宅であった。

年代物と分かるロールスロイスは振動を主に感じさせないほどゆったりとした動作で、門の前で停車する。

監視カメラでもあるのか門は自動的に開き、客の訪問を心待ちにしていたように車を邸宅内に招く。

車から降りた車の主は、ゆっくりとした足取りで、玄関に向かった。玄関の前には門番だろういでたちの男がにこやかな微笑を浮かべ、扉を開けた。扉の先、玄関ホールから照明が霧の中に射し込み、ホールに居た執事が微かな笑みを浮かべ挨拶をした。

「これは、サー・アレン」

軽く会釈し、アレン・チャーチルはこの館の主人のことを聞く。

「旦那様は、サー・アレンのお越しを心待ちにしております」

「それは嬉しいね」

ただ微笑を浮かべ、それに応えると執事として望みうる、最高の物腰でありがとうございますと答え、彼の尊敬してやまない主人の下へ客人を案内した。

時間だけが出しうる飴色がかった重厚な木製の扉。執事はその扉をノックし、主人に客人が着たことを告げる。

「そうか」

返答があり、執事は扉を開けた。

サー・アレンは一礼すると部屋に入った。執事は主人からの目配せに肯くと、部屋には入らず下がる。

「急な呼び出しに応じてもらって悪かったね」

安楽椅子に座っていた館の主人、ジョゼフ・ストリンガーが立ち上がる。

「そんなことはありませんよ。私は貴方が語る話が楽しみなのですから」

「懐古趣味の老人に対して、これほど嬉しい言葉はないね」

「はは、懐古趣味などとは言わないでください。まだまだ貴方は現

役ですよ」

「あまり煽てても何もではないが、その言葉は喜んで受け取ろう」  
猫のように喉を鳴らし、ジョゼフは笑う。

「さあ、何時までも立っていないで座ってくれ。今夜はじっくりと語ろうではないか」

「どのようなお話で？」

サー・アレンは勧められるままに安楽椅子と相對する一人掛け用のソファに座る。本皮製のそれは柔らかすぎず、適度にスプリングが利いていた。

「大変興味深い話だと思うよ。少なくとも、子供の頃夢見たような胸が弾むものであることを保障するよ」

「それはなんとも好奇心をそられる話ではありませんね。是非とも拝聴したい」

「いいとも、その為に私は多忙な君を呼んだのだからね。ホストとしての義務にかけて、ゲストには退屈な思いはさせないよ」

ジョゼフは水差しからグラスに水をうつすと、それに口をつけた。彼にとってそれは奇異に思えた。彼の記憶が正しければ、ジョゼフは琥珀色の液体を命の水と称し、万能の靈藥であるとして扱っていた。それがこれである。趣旨換えしたのだろうか？

「最近、妻に酒は禁止されていてね、隠されておるのだよ。君さえ

良ければ用意させるが、どうだね？」

アレンの視線に気づいたのだろうか、ジョセフはそう応えると、遙かローマの頃より我々の上には妻が君臨しているのだよと少々ばつが悪そうに言った。

そういえば　と、ジョゼフが愛妻家であることでも、その筋では有名であることを思い出し、それは事実だった。

「いえいえ、奥様のご配慮を破るつもりはありませんよ」

苦笑を一つ浮かべる。要するに何時の時代も、何処の世界も、男が女に勝った試しはないというわけだ。

「ならば、お茶でも用意させよう」

そう言って、部屋の外に居るだろう執事を呼んだ。

程なく、先ほどの執事がワゴンを押すメイドを伴い現れた。ワゴンの上にはティーポットを初め、簡単な軽食も用意されており、モルト・ウイスキーのボトルもその中には混じっていた。それを見つけられ、ばつの悪そうにジョゼフは言う。

「これは、な。紅茶の香り付けのためのものだよ」

「そういうことしておきましょう」

笑い声を滲ませ言いながら、サー・アレンはメイドから、紅茶を受け取る。

ジョゼフはモルト・ウイスキーの水割りを一口、口にし、喉を湿

らすと、口を開いた。

「君は、その昔あるイタリア人が喧伝した東洋にあるという黄金の国について知っているかね？」

グラスを傾ける。氷が崩れ、からんと音をたてる。

「ええ、貴方ほどではないですが、多少は存じております」

「では、先日といつても一ヶ月以上前になるが、かの国で特別魔法戦技官と呼ばれる新たな少女が産まれたのは知っておるかね？　これで、十二姉妹と言う訳だ。何とも羨ましい話ではないかね」

ええ、ええ、確かに羨ましい話ではありますね。こちらは、特別魔法戦技官なんてものは持ちえておりませんもの。これも、貴方が大嫌いな、あの大フランス主義とも呼べる復古主義に固まった頑固な蛙食いのせいも多分にありましようね。

「ああ、その件でしたら、ええ、はい。親しいと呼べる程度の付き合いの友人があゝの国にはいますからね。彼から噂を少しばかり聞いています」

「それだつたら話は早い。丁度、マイ・リトル・レディに世の中の仕組みがどうなっているのか、教える時期に着たのではないかと、そう考えているのだが、君はどう思うかね？」

少しアレンは考える。

目の前のロードが付く、老人が何を考えているかおおよそ想像が付く。

引退していたとしてもおかしくない年齢に達していても、その奥

深き眼光はいまだ最盛期のそれであり、むしろ老獺さが加わりその光の奥深さにおいては勝っている。事実、英国T O CはおるかE U T O C内でも隠然たる勢力を維持させている。つまりは時の流れは老獺さに磨きをかけたわけだ。

彼は閃きに似た感覚に襲われ、老人の意図を正しく読み取った。ああ、そうか。つまりはそういうことか。途端、おかしくなり笑い出しそうになるのを堪える。その努力は英国的貴族に似つかわしいもので、その成果として口元に僅かな微笑を浮かべるのみだった。

「いいお考えでしょう。彼女には力があります。ですが、いまだ戦闘経験という面に限ってみれば無知に近いといってよいでしょう。本来ならばそれこそが望まれるべきものなのでしょうが、現実はそのを容赦しません。それに、かの国の姉妹達は彼女にとって得難い友達になるでしょうし、ね」

「ふむ、ならば決まりだな」

グラスに半分ほど残っていた琥珀色の液体を一気に飲み干した。そして、それまでとは違い、英国T O C・指導部『円卓』のアーサー王の席に座る者としての顔になる。

「勲爵士アレン・チャーチル。君を英国T O Cの高等弁務官に任命する。詳細は追って沙汰する。喜びたまえ、君は愛国心を示せる機会が与えられたのだ。つまりは『英国は各員がその義務を全うすることを期待する』ということだ」

そこで一旦口を閉じると、人の悪い笑みを浮かべる。現役時代、悪魔のようだと評された笑みを浮かべると、大時代的な動作で口を開く。



「ん、こう胸が弾むような話ではないかな？　なんととっても、女王陛下の御宸襟を安んじて奉るのが臣下たるの勤めなのだから、な」

そこで、回想を切り上げると彼は少女に命じ、その場から移動する。何時までも此処に居る理由もないし、既に位相結界は解かれている。早々に立ち去ったほうが、具合がいい。

ふと、彼は振り返る。

視線の先には、銃を三個に分割され収納されている、大きく頑丈そうなトランクケースを引きずっている少女が居た。

彼は思う。

ええ、ええ、言う通り。中々と胸躍る話ではありませんよ。ですが、やはり観客としての視点からはそういえるのでしょうか。当事者じやあ、とてもじゃないが笑えませんよ。違う意味においては胸躍りますかね。

世の中はアイロニーで満ちている。

\*

最後の架空存在を仕留めた弾丸。

放たれた位置は方向から推測するしかないが、報告をすると蒼司はその必要はないという。

あすはは不可解に思いながらも、蒼司の言うとおりにした。

『Mission Complete』

アカツキが任務の終了を告げる。

『Don't mind, My master』

「ありがと、あっちゃん」

あすはは労いの言葉を素直に受け取ると、変身を解除する。早くしないと位相結界が解除されてしまうので、気持ち焦り気味だ。

自分の格好を確認し、空の色を仰ぎ見る。少し前までとは色の濃淡の違う青空が広がっている。今日も冬晴れだ。

あすはは微笑を一つ浮かべ、日本ＴＯＣ立川基地に向かった。

移動手段はＪＲである。流石に緊急時でもない移動に、わざわざ位相結界をはり、ＭＭＪＡを使用することは認められていなかった。近隣の駅からＪＲに乗り、西立川駅で降りる。

本来なら、あすはは本部付けであるから本部に帰還するのだが、今日は出撃前に蒼司から立川支部に向かうように指示されていた。

日本ＴＯＣ立川基地は、アメリカ軍から返還された旧日本陸軍の旧立川飛行場の跡地西側に設けられた施設で。表向きには鉛筆からロケットまで売っている旧財閥系大企業の開発研究所になっており、実際そこは研究所としての側面もある。最も、本部と同じように、地下には巨大な空間があり、そこが日本ＴＯＣ立川基地の区画であり、地上部分に存在する研究所一般職員のほとんどは、その存在を知らなかった。

基地に到着すると、顔馴染みの若い女性職員があすはを応接室へと案内した。

あすはは何故自分が応接室に案内されるのか疑問に思い、職員に質問するが曖昧な微笑を浮かべ決して答えようとしない。実際、その理由を知らないのだろう困ったような笑みを浮かべている。

そうこうしているうちに、応接室の前に到着する。女性職員は、自分はここまでだからと、軽く手を振り、あすはと分かれる。

あすはは扉の前に立つと、ノックをした。直ぐに返事が返ってきた。

失礼しますとあすはは扉を開け、入室する。

部屋に居たのは、彼女の担当上官である青崎蒼司と同じ特別魔法戦技官の同僚であり先輩であり親友でもある神楽イスズの二人。そして、見知らぬ白人の男女。その二人こそ、先ほど最後の架空存在を仕留めた犯人だった。

見知らぬ訪問客に、少しでも戸惑いの表情を浮かべるも、それは極一瞬のこと。あすはが持っている生来の明るさで、直ぐに笑顔になると蒼司に呼ばれるままに空いているソファに座った。

「こんにちは、日向あすはさん」

につこりと柔らかな微笑を浮かべ、挨拶をした。完璧なアクセントの日本語だった。彼、アレン・チャールは語学の才があり、以前決して短くない時間をこの国で過ごした経験があった。なのだから、それもまた当然だった。

目の前の外国人が瞳をまん丸にした。彼女のいまだ短い人生において、彼のような日本語を完璧に操る外国人はTVの中だけでしか見たことがなかった。

そんなあすはの様子を横目に、蒼司はアレン・チャールと腰掛もせず、彼の背後に従者のように立っている少女　アリス・ダニエルを紹介する。

「……………」

アレンとは違い、無言。だけれど、深々と丁寧に頭を下げる。なので、あすはは自分と同じぐらいの年齢に写る彼女　アリスちゃん　は日本語を喋れないのだと、そう思った。

「彼女は口下手だね。喋れないけれど、日本語は少しだけなら理解出来るから、仲良くしてやって欲しい」

苦笑を浮かべ、アレンは言った。

あすははアレンの言葉に笑みを浮かべ肯き、

「マイ・ネーム・イズ・アン・アスハ・ヒナタ……」

と、おぼろげな記憶を頼りに、あすははたどたく自己紹介をする。といつても小学生のことだから、自分の名前を言うのが精一杯なのだが。

どきどきと胸が高鳴り、緊張しながらアリスを見るあすは。アリスはこくりと肯くと、手を差し出した。

あすははアリスの意図を察し、嬉しそうに表情を崩し、自分も腕を出し、握手する。

その様子を微笑ましいもののように眺める、彼女ら以外の三人。アレンは、このどうしようもない世界に一つぐらいいは無垢なままの綺麗なものがあってもいいのではないかと、そう思った。その微笑ましい光景は、そう思わせるのに充分なものだった。

「イズズ、丁度昼飯ときだ。二人を連れて食堂に連れてってくれ。俺はこいつと大事な話し合いがある」

財布から日本ＴＯＣ職員に配給されている、日本ＴＯＣのマスクットキャラクターが二等親でデフォルメされて描かれたＩＣカードを一枚抜き出すと、言葉と共にイズズに放った。

「ええ、分かりました」

カードをキャッチし、年齢不相応の母性的な笑みでイスズはそれに応じると、正反対の二人の少女を連れ、応接室から出た。

ドアが閉まるのを確認すると、アレンは口を開く。

「彼女達が、日本TOCが誇るWizか。中々と可愛い女の子じゃないか」

『Wiz』とは『Wizard』の略称で、日本TOCが誇る独自の対架空存在用戦力・特別魔法戦技官のことを各国のTOCが呼んでいる名称である。

「ふん、知らなかったな。貴様に少女趣味があるなんてな」

旧友としての気安さからか、普段よりも蒼司の口調は乱暴だった。

「おいおい、いつから僕は性倒錯者になったんだよ」

苦笑いを浮かべ、冗談だとは分かっているけど、アレンはそれを否定する。

「まあ、別に個人の性癖をどうこういう気はないが、な。悪趣味が過ぎるぞ」

視線を外し、吐き捨てるように呟く。

蒼司はアリス・ダニエルを一目見た瞬間絶句した。彼女は、蒼司の記憶のまま、十数年前とまったく同じ姿だったからだった。

「まあ、ね。認めるよ」

顔を伏せ、苦痛に喘ぐかのように、正に絞りだすと表現しているようにアレンは言った。

「別に、叱ってるわけじゃねえよ。だが、これは皮肉に過ぎる」

やりきれないという思いがありありと蒼司の顔に浮かんでいる。

「あの日以来、建前上は人類の存続が第一義になっているからね。足掻いているんだよ、誰も彼もが。それに、こうでもしなくちゃ、彼女は僕たちの前にもう一度現れることも無かったんだろうね。少なくとも僕は、その点だけはあるがたいと思うよ」

「……………」

無言。

時に無言は雄弁を上回ることがある。

蒼司は彼の気持ちに文字通り、痛いほど理解出来る。それに、明日が来ることを何の疑いも無く信じられるほど、彼は子供ではないのだから、理不尽だろうが不条理だろうが、それは受け入れざるを得ない現実なのだということは分かっている。

「僕たちは、大人だからね」

遠くを見るようにアレンは言った。

「まあ、な。大人だから、未来に対して義務と責任を背負わなければならぬ。割の悪い仕事だよ。大人って居るのは、な」

蒼司は同意した。

好きで大人になったわけではないが、確かに自分は大人なのだ。何時までも気に食わないからといって駄々をこねている場合じゃないし、許される立場でもない。最も、最近では大人とはいえないような奴が多すぎる気もするが、少なくとも庇護されるべき子供ではないことは確かだな。

「そう。そして、その手段として我が大英帝国が手に入れた手札の一つがアイアン・メイデンであり、そのシリーズの試作一号機、アリス・ダニエルというわけだ」

二人は顔を見合わせ乾いた笑い声をあげる。空虚な声で。

「まったく、酷い話だ」

「ああ本当に酷い話だ」

彼女達の存在が不可欠であるとはいえ、どう言い繕っても子供を戦わせているという事実の免罪符にはなりはしない。

そのことを自覚して尚、現実は否応無く彼女達の力は必要とされており、無くてはならないものだった。

だからこそ、彼等は笑う。笑いたい気分なのだ。どうしようもないほどに。

\*

立川基地は本部より大きな面積を有しているのに比例して、食堂もまた本部より広がった。

イスズは蒼司より預かったカードを食券機に差し入れる。

「好きなものを選んで」

全てのボタンに点灯ランプが灯った食券機の前からどき、後ろに居る二人に言った。

「いいのっ!？」

任務が終わって立川基地に直行してきたので何も食べていないせいか、眼を輝かせ、食券の自販機の傍らにあるメニューのサンプルのウィンドウを眺める。あすはの様子にイスズはくすりと笑うと、どうしていいのか分からないだろうアリスに言葉と簡単なジャスチャーで自分の意図を説明した。

「……………」

視線をイスズの顔とサンプルを交互に向けるとアリスはこくりと肯き、自販機の前に立つ、そして迷い無くBLTサンドのボタンを押した。

アリスは吐き出された食券に手を伸ばし、それをイスズに差し出した。

「うん、ちょっと待っててね」

受け取ると、自分の分の鍋焼きうどんのボタンを押す。

「あすは、早くしてね」

「うん、でも迷うなあ。ハンバーグも食べたいし、カレーライスも美味しそうだし……………」



どうやらその二つのどちらかにしようか迷っているらしい。先ほどから二つのサンプルの間を視線が行き交っている。

「両方にすればいいんじゃないかな」

あすはの様子に見かねたイスズは、あすはに提案し、あるサンプルに指を向ける。

「うんっ！」

あすはは満面の笑みを浮かべ、勢い良く肯いた。  
イスズの細く華奢な指が指し示した先にはハンバーグカレーのサンプル（六百五十円）があった。

「あすは、席を取っておいて」

言い残すとイスズは三人分の食券を持ち、カウンターに向かった。本当ならどちらか片方に手伝って欲しいところだが、勝手のわからないアリスに手伝ってもらうわけにもいかないという、イスズの配慮だった。

「うん、じゃあ行こう。アリスちゃん」

アリスの手を取り、テーブルに向かう。手を握られたことに最初、動揺するが、それも一瞬のこと。弱いながらも握り返すと、直ぐに手を引かれるままにテーブルに向かった。

テーブルの上に食事が並ぶ。

結局のところ、矢張りイスズ一人では運びきれなかったので、職員の一人在見かねたのか、手伝ってもらい、三人分の食事を無事並ぶことが出来た。

三人は手伝ってもらった職員にお礼を言つと、席に着く。

「いただきます」

元気よく言つて、スプーンを持ち上げ、さあ今から食べるぞと言う所で、無常にもあの音色がアカツキとユキカゼから鳴り響く。握り締めているスプーンを持つ手が凍りつく。

以前にも似たような状況があつた。

ぶるぶると腕が振るえ、内心の葛藤がどれほど激しいのかわかる。

「あすは……」

イスズはあすはの心中を察し、声をかけるが届かない。

その時、あすはの眼前に差し出される皿。その皿にはアリスが注文したBLTサンドが四つ載っている。

「……………」

真つ直ぐな視線でアリスはあすはを見詰める。

「ええつと、……貰つてもいいの？」

少しだけ戸惑いながらアリスは訊ねた。

「……………」

肯定するように、こくりとアリスは肯いた。

「ありがとう！」

あすはは言いながら手を伸ばす。取ったのを確認すると、アリスは皿をイスズに向ける。

「……………ありがとう」

お礼を言いながらイスズも手を伸ばした。何だかんだいって、イスズも空腹だった。

呼び出しの催促だろう、食堂に二人が可及的速やかに作戦室に向かうようにというアナウンスが響いた。

「あすは」

「でも、……………」

ちらりとアリスを見る。一人でここにおいていくわけにも行かない。

「……………」

私は大丈夫というようにアリスは肯き、食堂の入り口に指差す。

二人は指の先へ視線を送った。視線の先にはアレン・チャールが居た。

二人の少女の後姿を眺めながら、アレンは口を開いた。

「では僕らも行こうか、アリス」

蒼司からは許可を貰っている。

基本的には観戦だが、機会があるのなら参戦してもいいとアレンは考えている。どれだけアリスが架空存在に通用するのか興味があったし、それ以上に彼女の為だ。

「アイ・サー」

口調とは裏腹に、鈴が転がるような可愛らしい声。声の主は、相反して無表情。何の感情の色も浮かんでいなかった。

その様子に、アレンは哀しそうに顔を曇らせる。

あの頃の彼女だったら、『何処に?』と好奇心に顔を輝かせ訊いてくるだろう。だけれど、彼女からその種の質問はない。当然だった。アリス・ダニエルはそういう風に条件付けられている。

そのことを知っていて尚、好奇心旺盛で、何にでも興味を持っていたあの頃の天真爛漫とした彼女は何処にも居ないと、今更ながら思い知る。同じ名前、同じ容姿、同じ容貌。何等相違点は無いはずなのに、それなのにもうあの頃の周囲を明るくする笑顔を見ることが出来ない。

未練であることは分かっている。本質的には、何等彼女が変わっていないということも知っている。

それでも、それでも、だ。

運命と言うものがあるならば、皮肉に過ぎる。正に『Irony of Fate』。世界は皮肉に満ちている。

それでも、受け入れたのだ。

でなければ、この声を聴くことが出来なかったのだ。ならば、否応もない。今は存在価値を認めさせ、彼女の立場を存在を確立すること。それこそが彼の目的。

彼はもう二度と失いたくは無かった。あの喪失感は二度味わうべきものじゃない。

だからこそ、彼 アレン・チャーチルは此処に居る。

二人は立川基地中央作戦室にやってきた。

其処には司令部作戦課の職員がつめており、教導官である青崎蒼司が二人の到着を待っていた。

室内は情報収集や実働部隊への運用計画の作成及び指揮などで、殺気立っているといつてよいほどの喧騒で満ちていた。彼等、指揮官にとってこここそが、戦場だからだった。

蒼司は二人を室内の一角に置かれている大型のテーブルへと連れて行き、地図を見せる。

それは東京都の外れ、近隣の県との境目にあり自然が豊富に残っている場所であり、その地図上、赤い丸で囲まれている地点が架空存在の出現ポイントだった。

「先ほど近隣地区でエーテル振動値が観測された。ホールの出現は確認されたが、いまだ架空存在は確認されていない。だが時期に確認されるだろう。これに伴い顕現までの猶予はあまりないと判断される。お前達は直ちに出勤し、目標を速やかに殲滅して欲しい。検出されたエーテルの濃度により、ほぼ一ヶ月ぶりの大規模出現だろうと予測される。他に質問は？」

二人は特に疑問に感じた事柄は無かった。

「では出撃だ。生きて戻って来い。以上」

「はい！」

それで解散し、二人は外へと駆け出した。

程なく中庭に出る。

「あっちゃん、お仕事だよ！」

『Yes , My Master . Change , Assault form』

アカツキは返事をし、二つの魔法陣をあすはの頭上に展開させ、あすはの肢体に装備が装着される。

「ユキカゼ、私達もアサルトフォームに変身」

『了解しました。アサルトフォーム、転送』

隣に居たイスズもあすはと同じように、自分の召還機『ユキカゼ』に呼びかけ、アサルトフォームを装着する。

互いの姿を確認すると、互いに肯く。そして二人を見送るために集まった周囲の職員達に敬礼し、出撃した。

\*

都下だとは思えないぐらいの自然が眼下に広がっている。場所は奥多摩、針葉樹の木々が生い茂っている。

そんな森林地帯に、ざっと見渡しただけで、両の手の指ほどの数の架空存在がいるが、幸いなことに大型タイプの姿は無く、小型と中型だけのようだ。

「あすは、私がブレイドで切り込むから、バスターで援護して」

イスズは架空存在の群の構成を確認すると直ぐにユキカゼに命じ、フォームを変化させる。

イスズは正しくあすはの資質を認識していた。

彼女の本領は中長距離における砲撃打撃戦だ。あすはなら鍛えればアウトレンジも可能になるかもしれない。むしろ成って貰いたい。その才能としかいえない類稀なる魔力容量及び、それに見合うだけの出力の大きさがそれを可能であることを証明していた。自分のような小手先の技術をあすはは持たないし、その必要もない。あすはには、その代わりに誰にも撃ち負けないだけの火力がある。ならば、自ずと役割は決まってくる。自分が切り込み役になるのだ。

そしてイスズは自分がどちらかといえば近距離戦闘のほうが好みであり、あすはほど、魔力容量が多くない（それでも、一般魔法戦技官に比べれば充分すぎるほど多いのだが）ことを自覚している。そして、あすは以上に魔力コントロールに長けていることも自覚している。だからこそその役割分担。適者適用である。

「うん、分かったよ！」

あすははイスズの言うとおりにバスターフォームへと変化させる。

「アカツキ、フルドライブ！」

デバイスから伸びる二つの放熱板が過剰な熱を発して赤く色づき、また大気のエーテルを吸収する為のフィンが伸びる。

『Yes , My Master . Full Drive』

アカツキはそれに応え、自身に存在する魔力回路を起動させた。

「いつけーッ！」

砲口を開いたデバイスを架空存在の群の中心に向け、極太の光線を一条放った。収束型砲撃魔法による一撃。

放たれるのと同時にイスズは架空存在に向かって突進する。一メートルほどの長さの光刃が二つ、両手に握られているデバイスから伸びている。彼女のデバイスは黒と白の二つのパーツから構成され、状況に応じ使い分けることが出来る。そしてこの場合は、この二刀の形態が一番合っていると、イスズは確信している。

光線は中型と小型の二匹を巻き込み着弾した。それと同時に距離が開いていたために被害の軽い小型の架空存在に踊りかかる。

そして切られたという認識させる暇も与えず、二つの切っ先は頭部を両断した。

「まずは、一匹」

そして、倒したばかりの架空存在の背後に居た別の架空存在に向かってデバイスを投擲し、そのまま駆け出す。投擲されたデバイスは正確無比に中型架空存在の眉間を撃ち貫き、イスズは数寸の間も置かず突き刺さったままのデバイスを握り、そのまま勢いよく切り下ろす。

「二匹目」

瞬間、イスズはしゃがみ込んだ。それまで頭部があった位置を熊型架空存在の豪腕が軌跡を描く。背後からの一撃。イスズはそのまま足目掛け、光刃を横薙ぎする。そして直ぐに、その場から飛びのき、離れる。

次の瞬間、架空存在目掛け空から光弾が降り注いだ。



イスズは見上げた。空中にデバイスを構えたあすはの姿が見える。

「三回目」

小さな微笑を浮かべ、呟いた。

少し離れた開けた場所。高台になっている位置から、アレン・チャールとアリス・ダニエルは観戦していた。

「噂以上だ」

瞬く間の間に半分ほどまでに撃ち減らしたその手際に、思わずアレンは感嘆の息を吐く。

あれだけの戦果を得るのに、どれだけの戦力が必要だろうか？  
少なくとも見積もって、対架空存在用兵装を装備した完全編成の大隊が二三個必要だ。それも時間制限を用いない場合での話で、制限するならばそれ以上の戦力が必要だろうな。

なのだから、彼女のような存在の出鱈目さ加減がよくわかる。

それが十二人も居り、まだまだその数を増やしているのだ。どうやら技術面では本当に対架空存在用戦備は日本ＴＯＣが抜きん出ているという予想は当たっているというわけか。

随分と出遅れたものだ。これも無神教ゆえの節操なしからか。若しくは、エコノミックアニマルとすら呼ばれた日本人の特質である勤勉さ故か。どちらにしろ、

「……円卓の老人がＡＭの完成を急がせるのも肯ける、な」

この現実には、あの老獺極まりない老人達が危機感を持つなというほうが余程可笑しい話ではある。ちらりと横目にアリスを見る。そ

して彼女こそ、我が英国T O Cが実戦化を急いでいる対架空存在用兵装『アイアン・メイデン』であり、A Mシリーズの試作一号機であるわけだ。

アレンは知らずに表情を歪めていた。それは笑みというには歪に過ぎるものだった。

その間も戦闘は続く。

あのペースなら、直ぐに勝負は決すると思われたのだが、雲行きが怪しくなっていた。

残った架空存在が一塊に集まりだし、周囲に糸を噴出した。そして糸は架空存在を包み込み、二十メートルを超えるほどの大きさの繭状の物体を形成する。

嫌な予感でもするのか、そうはさせじと、イスズは切りかかり、あすはは魔力弾を撃つ。だが、鋼鉄の強度を持つそれには力不足だったのか、虚しく表皮を焦がし弾かれた。

「まずいな……」

その様子に、アレンは顔をしかめ呟く。

あの繭をアレンは知っていた。英国T O C情報部のデータベースに似たようなものが載っていた。もし、あれがその様なものなら、いささか不味いことになる。

本来なら、このまま観戦を決め込んで居たかったのだが、そんな悠長なことを言っている場合では無くなりそうだ。まあ、でも言い換えるなら、絶好の機会とも言えるな。

ここで、アイアン・メイデンの優秀性を喧伝してもいいだろう。どうせ、この戦闘も各国T O Cが記録しているのだ。損にはなるまい。

「ならば、やることは決まっている」

奴らに教えてやるのだ。彼女達だけが、脅威ではないことを。

「アリス、お前にオーダーする。あれを叩き潰せ。完膚なきまでに、微塵も残さず、エーテルの残滓すら残すことは許さん。殲滅しろ」

「アイ、サー」

肯き、背後に用意されたA M専用兵装が収納されているコンテナを展開させる。

そこから現れたのは、対架空存在用77mm砲『Crusader』。アリス・ダニエルが有する最大の火力である。

「……離れてください」

言いながらアリスはクルセイダーから伸びるケーブルを、自分の体にあるプラグに差し込む。

クルセイダーはT R S O A Wが開発、実用化させた魔力砲だった。クルセイダーは、アリス自身が持つ固有の魔力以外に、装薬の代わりに魔力を高濃度に圧縮し、封印したカートリッジを使用する。それにより瞬発的火力の増大に成功した。これは、収束型魔法よりも効率よく自分以外の魔力を使用することが出来る反面、射耗度が大きくすぎ、砲身自体が数発しかもたないという問題点があるが、それでも火力とは結局のところ如何に多くの鉄量（この場合魔力）を短時間で目標に叩き込められるかということであり、T R S O A Wは敢えてその問題点を、砲身を消耗品と割り切ることで目を瞑り、一つの答えとして出されたのが、このクルセイダーである。

「手荒く狙え」

アレンはアリスに言う通り、離れた位置に避難し、無線で指示する。標的は巨大であり、外殻を貫けるだけの威力はそれにはある。それ以上に、アレンは信頼していた。アリスが外すことは在り得ない、と。

「アイ、サー」

照準機を持ち上げ、その真芯に繭を据える。

「マジック・カートリッジ、ロード」

カートリッジが勢いよく装填される。

「撃テエッ！」

言葉を合図にトリガーを引いた。それと同時に、反動を相殺させるためのバックプラストが背後に放出された。

瞬間、役割を果たした葉莢が排出される。

同時に砲口からはアリスの身長以上の大きさの光線が一条、繭に向かい発射された。大気を震わせ、切り裂きながら一条の光線が軌跡を描き、目標に命中する。

通常の物理弾と違い、魔力弾はH E A T弾と同じ効果によりモノを破壊する。勿論、運動エネルギーによる衝撃によっても破壊することは可能ではあるが、基本的には熱量で相手を融解させ、貫通させる。この場合も、鋼鉄の硬度を誇る繭を融解し貫通させた。

アリスの一撃が、それまでですはとイスズの攻撃に掠り傷程度しか受けなかった繭に大孔を穿つ。

だが、完全には間に合わなかった。

打ち抜いた光線が収束した瞬間、大気が怯えるような咆哮が轟いた。

半径三メートルほどの貫通孔から爬虫類のような鱗がびっしりと生えた腕が突き出、鋭い爪を外殻に突き立て、繭をボール紙のように両手で切り裂いた。

音をたて姿を現したのは大型架空存在だった。神話に出てくるドラゴンのような形態を持つそれは、以前あすはが仕留めた架空存在よりも強大だった。それでも、まだ完全には成長しきってはいなかった。もし、砲撃が遅かったなら、完全な形で現れただろう。そういう点で言えば、幸いであった。

「アリス、往け。オール・ウェポン・フリーだ。好きにやれ、許可する」

アレンは自分の予想が当たってしまったことに舌打ちしたい気分になった。アレは彼にそうさせるほどの確かな脅威だ。出来うるならば、もう一撃でも叩き込みたいところだが、今の一撃で砲身が衝撃に耐えかねヒビが走っている。カタログスペックでは、もう数発は撃つことが可能なのだが、これでは到底撃つことが出来そうになり。これも試作兵器特有の弊害だ。時間が経てば、初期不良は改善され改良されるのだろうが、今はそんなことを言っても無駄であるし、砲身を交換している暇もない。

「アイ、サー」

壊れかけのクルセイダーを放り投げ、コンテナから最も重装備であるストライクユニットを取り出すと装備を整える。そしてアレンに対し略式の敬礼をすると、戦場へと向かった。

突然の砲撃、そして、大型架空存在の出現に二人は混乱の極みにあった。

それでも、二人はすぐさま態勢を整える。混乱するということだが、戦場で一番やってはいけないことだと、そう蒼司から教え込まれている。そして何より、戦場ではあり得ない様な事があり得るという現実。それを実戦経験から十分に学び取っていた。

あすはは混乱から脱すると、すぐさま魔力弾を放つ。チャージしていない為、それほどの威力ではないが、牽制するには十分な威力がある。魔力弾は、寸分違わず架空存在に命中したが、その外皮には傷一つついていない。

架空存在が持つ、爬虫類特有の瞳がイスズを睨んだ。

睨まれた瞬間、ゾクリとイスズの背筋を悪寒が走る。危機回避能力でも言うのだろうか、本能から来るそれをイスズは疑わない。すぐさま行動に移す。

一瞬遅れ、架空存在の頬が膨らみ、そして巨大な火炎球をイスズ目掛け吐き出した。それは弾丸よりも速く、イスズへと大気を焼きながら疾走する。

間一髪、正に紙一重の差で火炎球は虚しく地面を抉り、四散する。その痕は雑草一本残さず消え果て、クレーターのように陥没していた。

その様は焦土のそれである。幾ら、MMJAの装甲が硬くとも防ぎきれぬモノではない。

「くらうわけにはいかないわね……」

その威力に慄然としながらも、イスズはデバイスを一つに繋げ、出力をあげる。いまだ、欠片も挫けず、戦意は旺盛だった。

二撃目を放とうと、架空存在が口を閉じ、頬を膨らました、その瞬間。

数えるのもバカらしいほどの数の12.7mm ATE弾が頭上か

ら降り注ぐ。A F E弾は幻獣の張る防性結界を容易く貫通し、次々に着弾する。そして、次の瞬間には幻獣の頭部から激しい誘爆が起きた。

砂埃を上げ、アリス・ダニエルはイスズの眼前に降り立つと、銃口から硝煙の香りがする煙を吐き出すキャリバー50を放り捨て、三脚のついたE z 8を頭部に向け構える。

イスズは半ば絶句しながらその光景を見、次いで顔を左右に振った。上空に居るはずのあすはに視線を向ける。あすはも突然の出来事に絶句していた。

「……………」

アリスは振り向き、イスズに向かい視線を一瞬だけ投げかけた。その視線の意味を理解すると、イスズは了承したと言う様にこくりと肯き、ユキカゼを通じ、あすはと打ち合わせを行なう。

その間も、断続的に30mm A T F弾の発射音が響き、架空存在に着弾の煙が上がる。

「……………」

僅かにアリスは表情を顰めた。仕留めた手ごたえがなかったからだ。

小型架空存在程度なら、辺り場所さえ良ければ一撃で仕留められる威力をE z 8は持っているのだが、あの架空存在相手には力不足のようだ。それでも、流石に無傷とは言えず、致命傷とはいえないものの大小の傷を数多く負っているのが傍目からも分かるほど傷ついていた。

架空存在は度重なる攻撃を仕掛けてきたアリスに、憤怒の激情に彩られた瞳を向けた。そして、聞く者の魂を慄かせるような咆哮を上げ、鞭のようにしなやかな尻尾をアリスに向け勢いよく振り下ろ

し、叩きつける。

その一撃をEz8を盾にするように構え、勢いに逆らわず受けた衝撃のまま後方へ飛びのくと、Ez8から手を離れた。Ez8はこの一撃によって拉げ使い物にはなりそうにも無いのが一目で分かるほど拉げていた。

アリスは着地すると、すぐさまホルダーから二挺の拳銃型デバイスを抜き出し、握り締め、静かに目蓋を閉じる。

黒と白、それぞれの銃型デバイスの銃身には『Ashes to ashes』と『Dust to dust』の文字が刻まれている。

アリスがデバイスを起動させると同時にコードが延び、アリスの腕に存在するプラグと繋がる。  
瞬間、

『CODE - AtA , D t D . 「Ashes to ashes , Dust to dust」 起動』

アリスの中で浮かぶ言葉。

『灰は灰に、塵は塵に』

その言葉がキーと成り、起動音が低くデバイスから発した。

「……アクセルモード、オン」

目蓋を開き呟くと同時に、科学技術及び錬金術の粹を極め造られた四肢に存在する魔力回路に魔力炉から魔力が送られ全身に迸り漲る。

「……………」



アリスは四肢の様子を確認すると、動いた。

初動からフルスロットル。ブレイドフォームを超える機動性で架空存在を翻弄し、二丁拳銃により間断なく射撃する。だが、放たれた魔力の弾丸は防性結界を抜きはするものの、大きく威力を減衰された魔力弾では本来の破壊をもたらすこと無く、ただただ大型架空存在の強固な外皮を焦がすのみ。

だがアリスはそんなことに頓着せず、機械的に弾丸を大型架空存在に浴びせる。

自然と架空存在の意識がアリスに集中し、イスズに対しての隙が生じた。それを見逃すことなく、イスズは背後から切りかかる。出力をあげ、振り下ろされた光刃は安々と防性結界を切り裂き、外皮を貫くが、それでも威力不足なのか肉を浅く抉るだけの結果に終わる。

即席ながらそれを感じさせないほどに互いの息が合ったコンビネーションで、架空存在を翻弄し、手傷を負わせる。既に三分ほどは経つだろう。その戦果として、夥しい数の傷を全身に架空存在は負っていた。それでも決定打と成り得る傷は無く、彼女達に負わされた傷は痛痒にも感じるほどの無いかすり傷程度のもだった。当然、その力は寸分程も弱ってはおらず、逆に怒りを滾らせ我息軒昂とばかりに架空存在は二人へ向け、火炎弾を放ち、尾を振るい、腕を叩きつけ、苛烈な攻撃を仕掛ける。

だが、自分の持つ現有火力では、架空存在に致命傷を与えることが出来ないことをイスズもアリスも最初から理解している。それでも、攻撃の手を止めない。それは明確な目的があるためだ。そして、その策はもう直ぐ成る。

「イスズちゃん、アリスちゃん、お待たせ！」

あすはの声が天から響く。

それは二人が待ち望んだ声だった。

「アカツキ、フルドライブ！」

急速に周囲の大气からエーテル粒子を根こそぎ奪われていく。

デバイスから伸びる排熱フィンに余剰エーテル粒子を放出し金色に色付き、砲口に集まった目で見えるほどの濃密な魔力が輝きを放つ。

「ファイエルンツ！」

そう、全てはこの時の為だった。

それは酷くあつけない終わり方だった。

天上からの不意の一撃に、流石の架空存在も為す術なく撃ち貫かれ、体積の半分ほどを蒸発させた。

全てを打ち砕く、圧倒的な一撃。それを可能にする膨大というしかないあすはの魔力量。

アリスは自分での装備では打倒しえないことを確信し、この場に存在する一番大きな威力を有する攻撃に全てをかけたのだ。そしてそれが、あすはの全力全開の砲撃だった。

顕現して間もなかったからだろう。世界に対して存在が確立していなかった架空存在の残骸が、その名の通りエーテル粒子に変わり空に溶けてゆき、己が存在した痕跡もろとも消失していった。

「……………」

それを確認したアリスはアクセルモードを解除した。

それと同時に、四肢から排熱用の放出口が開くとそこから一斉に白い蒸気が放たれ、一瞬、白い煙が全身を隠した。そして、糸の切れた人形のように、態勢を崩し転倒しかける。

「……あ」

離れた位置に居たイスズが、それに気付き声を上げた。

だが、到底間に合う距離ではない。あわや、倒れるという瞬間。

アレン・チャールがアリスを抱きしめるように支えた。その身体はオーバーヒート気味のため素手では触れるのも躊躇われるほどの高温であったが、それを寸毫も省みることなくアレンは躊躇い無く素手で支える。

「良くやった」

アレンはアリスの癖のある髪をくしゃくしゃに撫でながら言った。その顔は、大事な人が戦地から無事に帰って着た人のそれだった。

「……………」

返事はなかった。それでも、アリスの瞳は温かな光を宿し、その頬は僅かながらも綻ばせていた。

\*

既に戦闘から数時間が経過していた。

「ふむ」

霞ヶ関にある日本TOC本部。

その一室で、今回の報告書を美嶋玲香が不機嫌そうに形の整った柳眉を僅かに顰めながら、報告書に目を通していた。

「つまり貴方の感想として、英国TOCは特別魔法戦技官とほぼ同等。少なくとも対抗できる程度の戦力を得たと。そう結論付けるのね」

切れ長の瞳を更に細め、玲香は蒼司に訊ねる。

「ええ、それだけの力を、彼等の言う所の『アイアン・メイデン』は持っていると思われます」

「そうね。人類にとっては喜ばしいことなのかしら、ね」

報告書に記載されているアリス・ダニエルの写真を眺め、言った。写真の中のアリス・ダニエルは子供らしからぬ感情のない表情で遠くを見詰めている。

「まあ、そうですね。喜んでいい事柄でしょう。対抗する手札が増えたのですから。まあ、上層部の一部の方々は一概にはそう言い切れないものを持っているでしょうけれど」

ため息を玲香は吐く。彼の言いたいことは分かる。何処の世界でも高度な政治的案件というものは存在する。

「見方の違いでしょうね。視点が変われば、表が裏になり、そして逆もまた然りというわけですよ」

「ええ、はい。その通りです」

「それで、実際のところどうなの？ 訊いてみたいわね。貴方の生の感想を」

腕組みをし、蒼司を探るような目つきで一瞥した。  
視線を外し

「……敵いませんね」

降参のポーズをすると、蒼司は話し始める。

「確かに、力だけでしたら、ウチの可愛い姉妹達と渡り合えるだけのものをAMは持っています。ですが、継戦能力という点については些か疑問が残ります」

「分かりやすくいうと？」

「燃費が悪いんです。まだ試作型らしいので多数の問題点がありますが、その中でも一際目立つのがその点でしょう。そしてそれを補うために、極力魔力を用いない武装を主としているものと思われま

す」  
最も、その点に限ればあすはも変わらないけれど、それを補えるだけのスタミナがあすはにあるので表面的には欠点になってはいないのだが、以前のイスズとの模擬戦闘のように考えなしに魔力を使っていれば直ぐに使い切ってしまうことも在り得るので、その辺りが今後の課題だろう。

「なるほど、ね。分かったわ、青崎蒼司一等教導官。貴官は詳細を纏め、そのレポートを可及的速やかに技術部研究局に提出すること以上です」

「わかりました」

今夜は徹夜だな、そううんざりと考えながらドアを潜ろうとしたとき、

「ところで、青崎くん」

不意に呼び止められた。

「なんででしょう?」

「アリス・ダニエルちゃん。本人は写真より可愛いのかしら?」

「御自分の目で確認するのがいいと思いますよ。価値観というものは人の数だけありますから」

玲香はとても面白いことを聞いたというように顔を綻ばせ、微笑を浮かべた。

「成るほど、最もね」

「では、失礼します」

どっと疲れが押し寄せてくるのを感じながら、彼は退散した。

＊

外来用に立川基地内で割り当てられた一室。簡易だが必要充分な工作設備が整ったそこでは現在、アレンと一緒にこの国にやってきたTRSAWのメカニック達がアリスを整備点検していた。

部屋の中央にある寝台に寝かされたアリスは意識が無いようであらかな寝顔をしており、四肢が外されていた。肩と大腿部からは精密機械が姿を見せ、それがサイエンスフィクションに出てくるようなワンシーンのようで現実感を喪失させており、よく出来た作り物のように見え、人形のような印象を人に与える。

「どうだ？」

アレンはアリスの傍らに居たメカニック達を束ねる整備班長に様子を訊ねた。整備班長は無精髭を生やし疲労の浮かんだ顔で左右に軽く顔を降った。

「正直な話、酷いもんです。何処もかしこもいかれてますよ。今直ぐにでも本国に送還してオーバーホールしたいぐらいです。それが叶わなけりゃ、せめて持って着たスペアのアームパーツに換装しなけりゃ使いもんになりやしません。まあ、ありったけのパーツを持ってきますからその点の心配はないですがね」

其処まで聞き、アレンは嘆息した。

「そこまで酷いのか」

「ええ、予想以上にアクセルモードの負荷が強かったんでしょ。これだから芸術家気取りの設計部の連中は必要以上に細かく設計し

すぎるんです。結局のところAMは兵器なんです。デリケートなサ  
ラブレッドじゃなくて実用性第一で丈夫が売りの雑役馬なんですよ。  
だから、シンプルさを一番にするべきなんです。こんな緻密な設計  
なんて凝り性で職人気質のドイツ人にでも任せりゃいいんです。後  
三十秒でも戦闘が長引けば、本当に危なかった所ですよ」

AMに関しては彼以上に信頼すべき者は居ない整備班長からのじ  
かの言葉に、少々不機嫌になるものの、理不尽なことには慣れつつ  
あるアレンはそうですかと静に肯く。

「では、スぺアに取り替えれば大丈夫だ、と？」

「まあ、そういう訳です。流石に日本TOCが誇る基地ですな。こ  
この設備なら充分に対処可能です。二・三時間ほど時間をください。  
それで新品と見間違えばかりに完璧に仕上げて見せますよ」

任せて置けというように、腕を掲げるジャスチャーをする。それ  
を見て、アレンは笑みをこぼした。

「ああ、任せる」

アレンは部屋から出た。これ以上留まっても、作業の邪魔にしか  
ならないし、誰もアレンにそれを期待しても居ない。単純に役割の  
違いだった。パン屋に誰も病気を治してもらおうとは思わない。パ  
ン屋は美味しいパンを焼けばいい。それと同じこと。

ドアを潜り抜けた先。少し歩くと、ちょっとした休憩スペースに  
なっておりベンチと自動販売機が置かれている。

そのベンチには先客が居た。

あすはとイスズの二人だ。



二人はアレンの姿を見つけると、立ち上がり駆けよって着た。

「アレンさん、アリスちゃんはっ!？」

駆け寄るなりあすは声を張り上げ、アリスの容態を問う。その表情はアリスの容態を本気で心配している様がありありと見て取れる。傍らに居るイスズも、あすはのように直接的ではないものの、同じぐらい本気で心配していた。

アレンは嬉しく思った。

ほんの短い間でしかないはずなのに、我が身のことのように彼女達はアリスのことを心配している。アリスにとって良い友人になれるかも知れない。本気で思ったわけじゃない。本気で願ったわけじゃない。それでも、時折神様というものは気まぐれを見せてくれるものらしい。

「……大丈夫です。あの子は強い子ですからね。直ぐに良くなりますよ」

心からの感謝を込め、アレンは言った。今にも泣き出してしまいそうになるのを我慢して。

アレンのそんな嬉しそうなそれでいて、今にも泣き出しそうな様子を不可解そうにしながらも、二人は安堵の表情を浮かべた。

アリス・ダニエルが五体満足で目覚め、直ぐ傍で疲れたのか眠っている友達を見つけるまで後幾ばくかの時間が必要だった。

Ep·02·Case of him· / Case of her·

ここでいったん打ち止めです。第三話は四割から五割ほど書き終えています。なので気長にお待ちください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6934r/>

---

魔法少女もの。

2011年6月17日07時56分発行